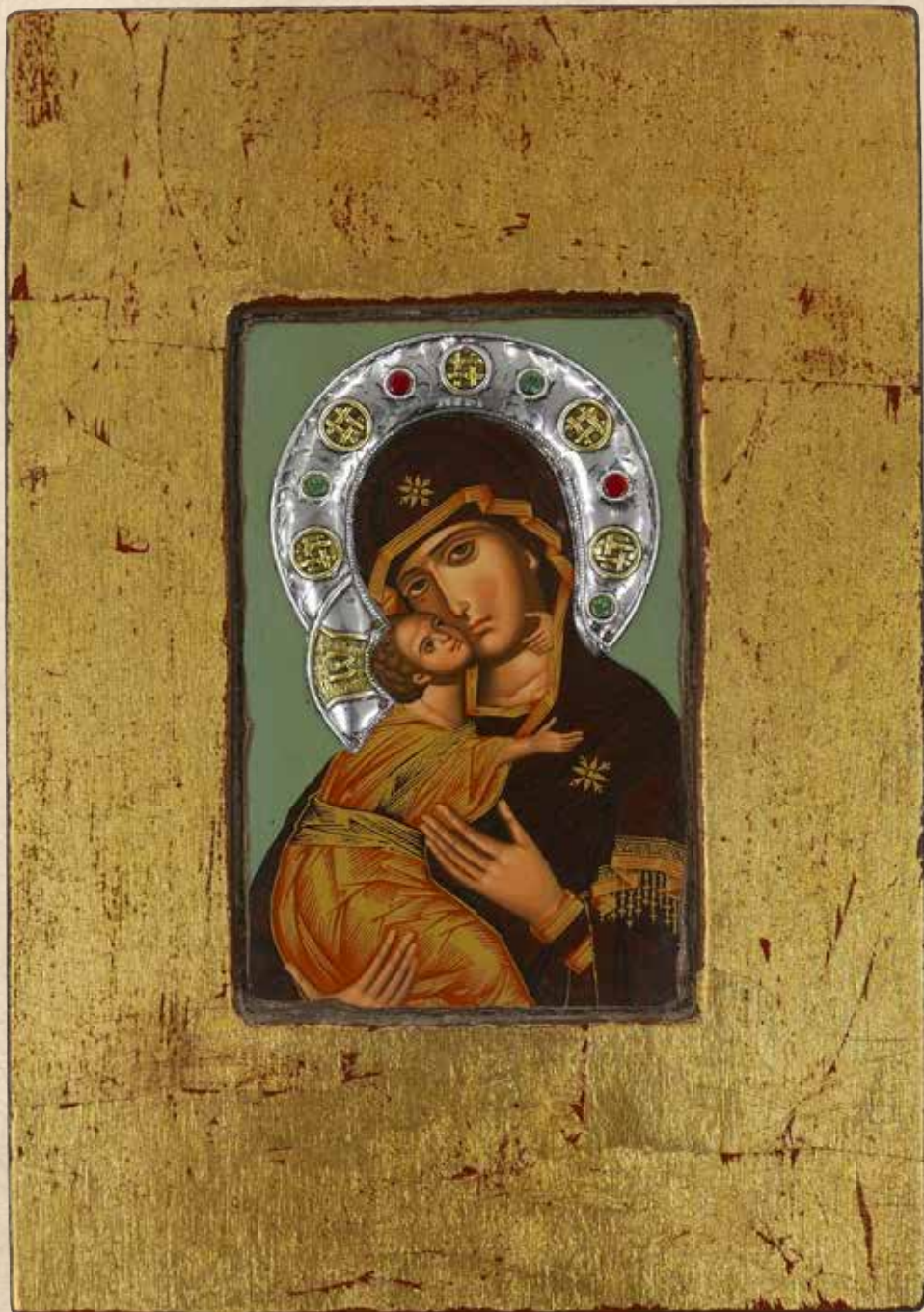


東方キリスト教 との出会い

—祈りのかたちとその拡がり—



EASTERN CHRISTIANITY

ごあいさつ

西南学院大学博物館は西南学院の建学の精神であるキリスト教主義を活動方針の基本に据え、2006年の開館以来、キリスト教文化に関する資料の収集と並び、キリスト教の歴史や文化に関する展覧会を実施してきました。

今回の展覧会は、初めてビザンティン以来の東方キリスト教の伝統に光を当てています。東方キリスト教とは、現代のギリシア正教、ロシア正教、東ヨーロッパの教会の「東方正教会」、そしてエチオピアやコプトなど「東方諸教会」の伝統を指します。また、その中心を成すギリシア教父の伝統は、西方ラテン教父・中世スコラ学などにも受け継がれ、東西キリスト教の大きな思想的源泉ともなっています。

東方キリスト教の伝統においては、典礼が重んじられてきました。そして、その祈りにおいて、イエス・キリストや聖母マリアを描いたイコン（聖像画）が深く崇敬されています。本展覧会では、ビザンティンの聖堂装飾を代表するモザイクやフレスコによるイコンを紹介するほか、イコンを特徴づける「模写」に注目し、イコンの意味について理解を深めていただくことを目的としています。

日本においては、江戸時代末期にロシアより正教会が伝来し、東日本を中心に拡大していきました。1891年に完成した駿河台のニコライ堂（東京復活大聖堂）は当時としては大建築であり、明治の日本における正教会の教勢の大きさを象徴しています。

本展覧会の開催にあたって、仙台ハリストス正教会辻永昇大主教様と東北学院大学教授の鐸木道剛先生には、調査に係るご協力、ご助言をはじめ、資料の出品など多大なるご協力を賜りました。また、そのほかハリストス正教会の皆様にも調査にご協力いただきました。末筆ではございますが、ご協力を賜りました皆様に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2018年7月17日

西南学院大学博物館

館長

後藤新治

開催概要

キリスト教には、東方キリスト教（東方正教会、東方諸教会）と西方キリスト教（カトリック、プロテスタント）の2つの伝統があります。このうち、ビザンティンの伝統を担うのが東方キリスト教です。その起源はイエス・キリストと出会った使徒たちに遡り、教父たちの時代を経て、ギリシアやロシアを中心に息づいています。

東方キリスト教の聖堂には、イエス・キリストやマリアを描いたイコンが置かれています。聖なる写しとも言うべきイコンの美は、東方キリスト教の祈りのかたちを示しています。

日本においては幕末から明治期にかけて、亜使徒聖ニコライの働きにより、日本正教会の礎が築かれました。その後、ロシア革命や二度にわたる世界大戦により日本正教会は苦難の道を歩みますが、聖ニコライが伝えた正教の教えは現代においても、日本全国で守り続けられています。

本展覧会では、東方キリスト教の祈りのかたちを紹介し、その歴史的広がりを辿ります。

会期 2018年7月17日(火)～2018年10月20日(土)

会場 西南学院大学博物館特別展示室、2階講堂

主催 西南学院大学博物館

協力 仙台 ハリストス正教会 辻永昇 大主教

目 次

ごあいさつ	
開催概要	1
目次・凡例	2
第1章 東方キリスト教の世界—— 光は東方より	3
第2章 イコン—— 祈りのかたち	9
1節 ウラジーミルの聖母——聖なる写し	9
2節 イコンと素材——物質の聖化	14
3節 19世紀ロシア・イコンと山下りん	17
第3章 祈りの拡がり—— 日本と正教会	19
1節 聖ニコライによる布教活動	19
2節 日本ハリストス正教会の祈り	22
論考	
イコン——受肉の神秘への眼差し 西南学院大学博物館学芸調査員 宮川 由衣	26
日本ハリストス正教会と九州 一人吉ハリストス正教会（生神女庇護聖堂）について— 西南学院大学博物館学芸調査員 中禮 尚史	29
出品目録	32

凡 例

- ◎本図録は2018年度西南学院大学博物館企画展I「東方キリスト教との出会い—祈りのかたちとその拡がり—」[会期：2018年7月17日(火)～10月20日(土)]開催にあたり、作成したものである。
- ◎人物名および地名の表記に関しては、基本的に原語に従った。
- ◎日本正教会史に関する資料および解説においては、原則として日本ハリストス正教会で用いられている表記に準じ、西暦および和暦を記載した。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。
- ◎本図録の資料解説および編集は1章、2章を宮川由衣(本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科研究生)、3章を中禮尚史(同上・本学国際文化学部生)がおこなった。編集補助には、野藤妙(本学博物館学芸調査員)、西山萌(本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程)、鬼束芽依(同上・本学国際文化学部生)があたった。

I

東方キリスト教の世界——光は東方より

「東方キリスト教」とは、ギリシア正教、ロシア正教など東ヨーロッパの「東方正教会」、エチオピアやコプトなどキリスト単性論に拠る「東方諸教会」を指す。このうち、「東方正教会」はビザンティン帝国の首都コンスタンティノポリス（現イスタンブール）に発し、コンスタンティノポリスの総主教を中心としていたキリスト教である。コンスタンティノポリスが1453年にオスマン・トルコ帝国の進撃にあって陥落し、ビザンティン帝国が滅亡した後は、東方キリスト教の中心はモスクワに移った。

東方キリスト教の概念

「東方キリスト教」という概念における、「東方」という語は、ヨーロッパ世界から見た東方、すなわち「東洋」や経度上の「東半球」を意味するのではない。ここで「東方」という言葉が「西方」との対比で使われていることは明らかだが、東西キリスト教のそれぞれの区分は、第一に政治的な境界、すなわち西暦紀元395年に東西に分割されるローマ帝国の境界に淵源を持ち、この政治的境界の基盤には、民族的・文化的な違いがある。

第二に、「東方」とは言語に基づく区分でもある。キリスト教成立以降の古代地中海世界の東半分はギリシア語、西半分はラテン語の文化圏に大きく二分される。実際、2世紀から8世紀半ばにかけて活躍した教父たちは、ギリシア語で著作したギリシア教父とラテン語で著作したラテン教父とに分けられる。このため、言語の点からみれば、「東方キリスト教」とは、元来はギリシア語によって養われた伝統である。すなわちそれは、新約聖書や七十人訳・ギリシア語旧約聖書を礎として、ローマ帝国の東半分に及び、ビザンティンの伝統に継承されているギリシアやロシア、セルビア、ブルガリア等々、後代の東ヨーロッパの国々に伝えられたキリスト教的伝統を指している。

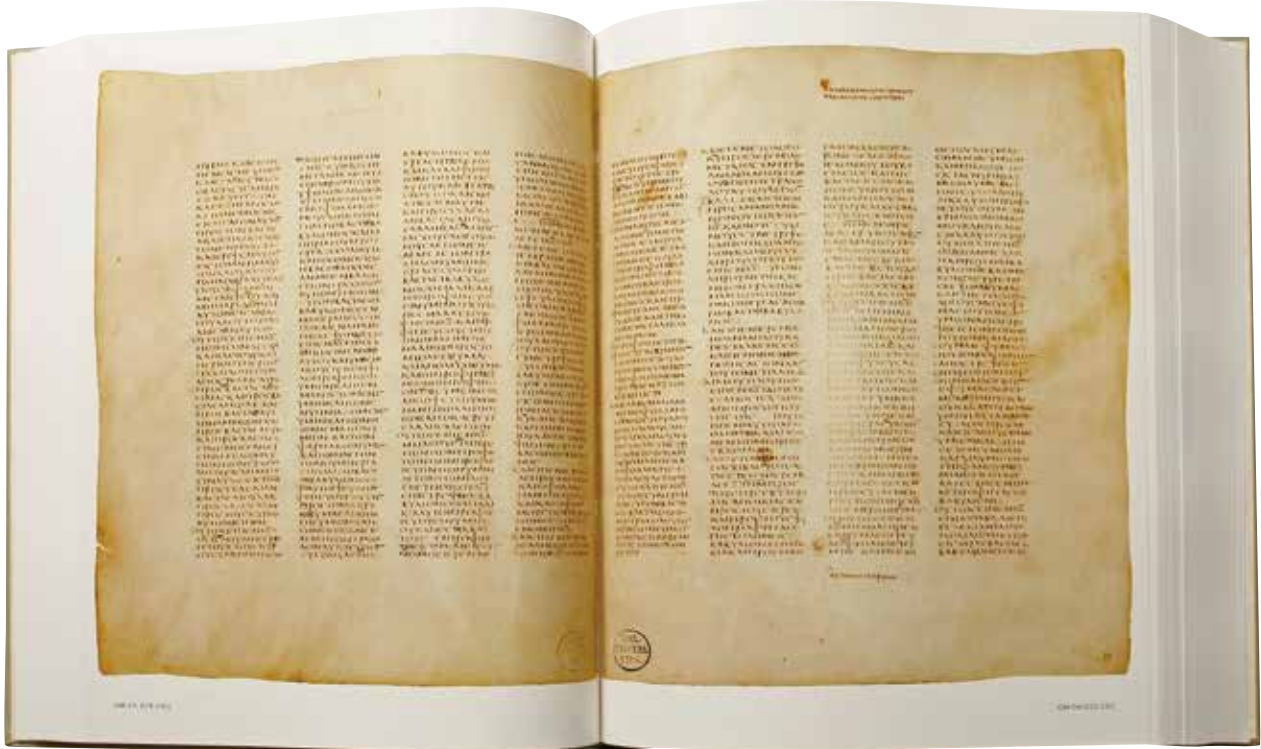
東方・ギリシア教父の伝統

「教父(教会の師父)」とは、(i)2世紀から8世紀半ばまでの「キリスト教古代」に属すること、(ii)学問において「正しい教え」を示す著作を残していること、(iii)「生活の聖性」を体現していること、そして(iv)教会の公式文書にその名が公にされていること、という四つの条件を満たす人々に対する称号である。

キリスト教古代における聖書釈義の伝統は大きく二つの学派に分かれる。一方は、象徴的・霊的解釈を重んじるアレクサンドリア学派である。クレメンス(150頃-215頃)やその弟子オリゲネス(185頃-254頃)がそれに属する。なお、アレクサンドリア学派の聖書釈義については、アレクサンドリアのフィロン(紀元前25-紀元後45頃)が、ユダヤ教の立場に立ちつつも、旧約聖書の言葉をプラトニズムの用語を用いて象徴的に解釈しており、その先駆的な役割を果たしたとも言われる。そしてもう一方が、より字義的な解釈を重んじるアンティオキア学派であり、ヨハネス・クリュソストモス(347頃-407)がその代表者である。

アレクサンドリア学派の伝統は、4世紀のカップドキアの教父たちに継承され、豊かな展開を見せる。すなわち、バシレイオス(330頃-379)、ナジアンゾスのグレゴリオス(325/30-390頃)、そしてニュッサのグレゴリオスという三人の教父であり、「カップドキアの三つの光」と称される。4世紀は西方ラテン教父のアウグスティヌス(354-430)と共に、「教父の黄金時代」と言われる。さらに、その伝統を継承し、集大成したのが7世紀の証聖者マクシモス(580頃-662)である。「証聖者(コンフェッソル)」という称号は、マクシモスが晩年に迫害を受けて、舌と右手とを切り落とされたことに由来する。

こうした教父の伝統は、ヘブライ・キリスト教の伝統の上にギリシア哲学の伝統が大きく摂取され、拮抗と共に統合されたものであった。そして、それは東方キリスト教世界についてはもちろん、西方ラテン教父・中世スコラ学などに対しても思想的・精神的源泉となっている。



1. **シナイ写本（複製）**

Sinai Codex (Copy)
西南学院大学博物館蔵

原資料：エジプト、4世紀
冊子本
ロンドン、大英図書館蔵

キリスト教の修道制の起源は、271年に下エジプトにおいて砂漠の隠修士（モノコス）となったアントニオス(251-356)に遡る。アントニオスを典型とし、3世紀末頃から、エジプトをはじめ、パレスティナ、シリアなどの地において、修道的生に身を投じる人々が多数現れるようになった。その修道生活の中心にあるのが、祈りや詩編朗唱、そして読書、労働、聖書写本の制作などの手仕事であった。シナイ写本は、エジプト、シナイ半島山岳地帯にあるシナイ山にあるエカテリナ修道院で発見されたギリシア語聖書写本である。シナイ山は、モーセが「燃える柴」に出会ったとされる場所であり(出エジプト3、1-14)、この写本が制作されたと考えられている4世紀頃には修道制が盛んに行われていた。その筆致は、聖書の言葉を丁寧に紡ぎながら、祈りとしての生を实践した修道士たちの姿を今に伝えている。(宮川)

祈りのかたち—— 聖山アトスと修道的伝統

ギリシア北方、エーゲ海に突き出したハルキディキ半島の東端に、祈りを中心とした修道的生の伝統が古より受け継がれてきた聖地がある。東方正教会の総本山とも言うべきこの場所は、「聖山アトス」と称される。アトスは今日まで女人禁制の掟を堅く守ってきた修道の地であり、世界遺産に登録されながらも観光地化されることなく、内部の撮影は厳しく制限されている。

950年頃、聖アタナシオスがアトス山から湧き出る豊かな水脈を見つけ出し、960年頃メグスティス・ラヴラ修道院を建設した。そしてその後、活発に共住型修道院が建てられ、修道士たちが居住するようになった。その修道思想は、「ヘシュカスム（静寂主義）」と呼ばれる。それは、祈りと観想を通じて内面の静寂を獲得し、神の働き・活動としてのエネルギーを能う限り受容し、自らの身に体現してゆくことを目的としている。

現在、アトスには、大きな20の修道院にそれぞれ100人前後が暮らしている。その他、スキテという小さな共同体やケリ(修道小屋)が点在し、およそ2000人の修道士が祈りを中心とした時給自足の生活を送っている。修道院の中には、ギリシアだけではなく、ロシア、セルビア、ブルガリアなどの修道院もあり、各国から正教徒の巡礼者が訪れている。アトスではユリウス暦を採用し続けており、俗世から13日の遅れがある。また、旧約聖書で神は夜を先に創造したことから、修道院では日没を0時とするビザンティン時間を用いており、時の刻みも違っている。

修道士でなくても正教徒の巡礼者は、入山許可証をもらえば3泊4日までアトス内の修道院で寝泊まりすることができる。アトスでの祈りは通常1日2回、季節によって異なるが、朝の祈りは夜明け前の4時に始まり8時頃まで、そして夕方の祈りは4時から7時頃までである。また、復活祭や降誕祭など大祭の際は、徹夜の祈りが行われる。こうして、アトスの修道士たちの祈りは、今日もまた、絶えることなく続けられているのである。

(参考:中西裕人『孤高の祈り——ギリシア正教の聖山アトス——』新潮社、2017年)



2.

聖ペテロと聖パウロ

St. Peter and St. Paul

エチオピア、19世紀、羊皮紙、着色、額装
西南学院大学博物館蔵

アフリカ大陸の北東部に位置するエチオピアでは4世紀以来、エチオピア正教が信仰されてきた。エチオピアやコプトなどの東方諸教会は、キリストの神性を強調する単性論*の伝統を継承している。本資料は、本来聖書あるいは祈祷書の挿絵であった部位を切り抜いた断簡であり、聖像画として制作されたものではない。ここで、ペテロは白髪と短い髭、パウロは広い額と長い髭という特徴で描かれているが、こうした描き方の典型は、早くも4世紀に確立している。(宮川)

*単性論にたつ東方諸教会としては、エジプトのコプト教会、エチオピア正教会、そしてアルメニア正教会などがある。なお、ビザンティンにおいては、451年のカルケドン公会議で、キリストに「神性」と「人性」、そのどちらか一方のみを認める主張が退けられ、両性論が採択されて「イエス・キリストは真の神であり、かつ真の人間である」ということが教義として確立した。

3.

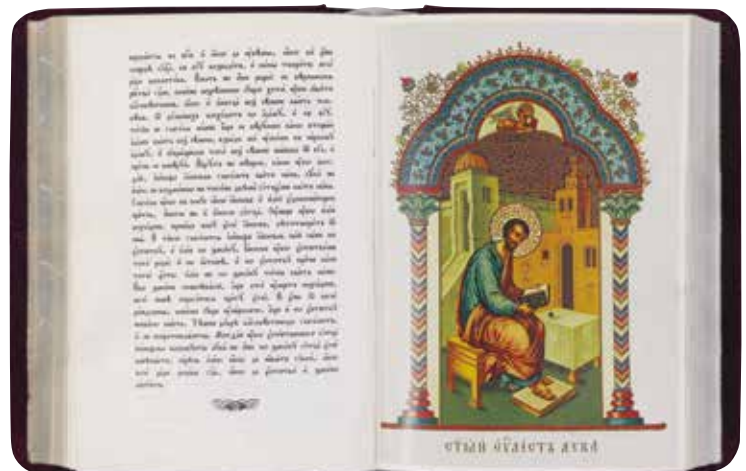
スラヴ語聖書

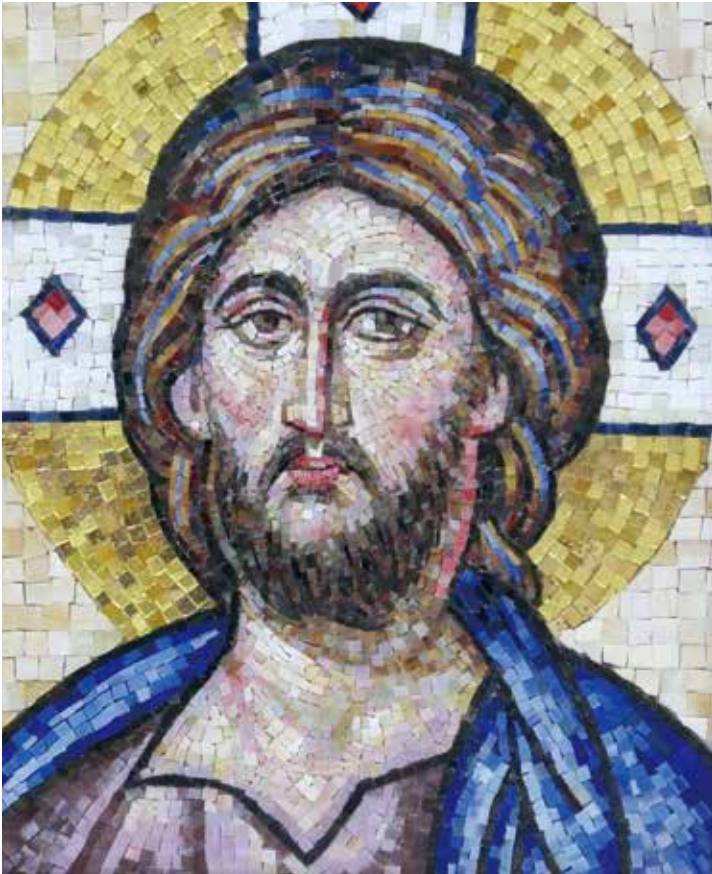
Slavic Bible

1998年、書冊

西南学院大学博物館蔵

ギリシア正教会では新約聖書や七十人訳・ギリシア語旧約聖書が用いられてきた。9世紀半ば頃からスラヴ人への布教の際、ギリシア語を模した人工的文章が考案され、古代教会スラヴ語が誕生した。この古代教会スラヴ語はスラヴ人の間で共通文語として使用され、後にスラヴ文字文化が発展する土台となった。ロシアでは1813年にロシア聖書協会が発足し、1876年にロシア語訳聖書が誕生した。(中禮)





4.

キリスト

Christ

ロシア、20～21世紀、モザイク

仙台ハリストス正教会 辻永 昇 大主教蔵

ロシア、ハバロフスクの聖ペテロパウロ女子修道院で制作されたモザイク画のキリスト像である。長い顔に細くて長い鼻梁、真ん中で分けられ、左右に流れる波打つ髪、口髭を蓄え、顎鬚はまっすぐ下に伸びるといったキリスト像の特徴を備えている。モザイクは、色ガラスの小片（テッセラ）を漆喰に埋め込み、模様や人物を表現する技法であり、ビザンティン美術の聖堂装飾に広く用いられている。ビザンティン帝国の首都コンスタンティノポリス（現イスタンブール）のハギア・ソフィア大聖堂のモザイクは現存する代表例として名高い。（宮川）



5.

聖ニコラ

St. Nicholas

セルビア、20～21世紀、フレスコ

仙台ハリストス正教会 辻永 昇 大主教蔵

セルビアのゾラン・ジュロヴィチ（Zoran Djurović）修士によるフレスコ壁画の一部のレプリカである。フレスコは、壁面に塗った漆喰が乾かないうちに、水または石灰水で溶いた顔料を用いて描く壁画技法の一つであり、モザイクと並び、ビザンティンの聖堂装飾を代表する技法である。オリジナルは、マケドニアのオフリドにある聖クリメント教会（1295年創建）の聖ニコラ（ロシア語でニコライ）の立像であると考えられる。オフリドは1018年、ビザンティン教会の大主教座となった町であり、ビザンティン時代のフレスコ画やイコンの名作が数多く残っている。（宮川）

キリスト像の成立——記号から肖像へ

旧約聖書の十戒の掟には、「あなたはいかなる像も造ってはならない。……それらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない(出エジプト20, 4-5)」とある。さらに、神はモーセに対し、「人はわたしを見て、なお生きていることはできない」(同33, 20)と告げている。

このように、旧約聖書において徹底される「神の不可視性」は、キリスト教にも受け継がれている。実際、初期キリスト教美術では、神であるキリストの姿を描くことは許されず、記号、象徴としての画像のみが許容された。たとえば、聖書の「わたしはよい羊飼いである」(ヨハネ福音書10, 11)との言葉に従って、羊飼いを描くことでキリストが表現された。また、「キリスト(XPICTOY)」の頭文字の「XP」でキリストを表すことは、こうした記号性を端的に示すものである。さらに、キリストの象徴として「魚」のイメージが用いられたが、魚はギリシア語で「イクトゥス(IXΘΥΣ)」であり、それは「イエス・キリスト ΙΗΣΟΥΣ ΧΡΙΣΤΟΣ ΘΕΟΥ ΥΙΟΣ ΣΩΤΗΡ」(イエス・キリスト・神の子・救い主)のモノグラムであった。これらは記号であって、キリストの肖像ではない。

キリストにその神性のみを認める見方からすれば、神であるキリストの姿を描くのは偶像崇拜にほかならない。しかし、キリストに「神性」と「人性」、そのどちらか一方のみを認める主張が退けられ、キリスト両性論——「イエス・キリストは真の神であり、かつ真の人間である」(ニカリア信条, 325年)、さらに展開させて、「イエス・キリストは神性と人性とのヒュポスタシスの結合である」(カルケドン信条, 451年)——が教義として確立した。そしてそのことの典拠が、「神の言(ロゴス)は、肉となって、われわれのうちに宿った」(ヨハネ福音書1, 14)、すなわち受肉という事柄であった。かくして、受

肉した神の言(ロゴス)たるイエス・キリストが神性と同時に人性——人であること——を有するがゆえに、その肖像を描くことが可能となったのである。

そして、530年頃に、キリストの真の肖像画とされるものが、シリアの町エデッサの城壁の中から発見される。それは、「マンディリオン」と呼ばれるキリストの顔が写ったタオルである。このマンディリオンは、描かれたのではない、すなわち「人の手によらない」(アケイロポイエートス)、キリストの姿を写したイコン(聖像画)である。このため、最も信頼できる肖像画として広まっていった。

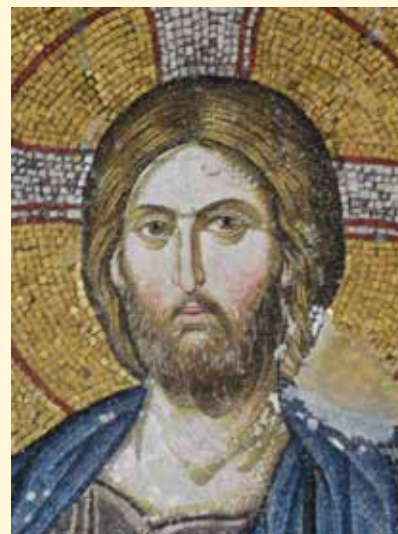
キリストのイコンにおけるキリストの特徴——長い顔に細くて長い鼻梁、真ん中で分けられ、左右に流れる波打つ髪、口髭を蓄え、顎鬚はまっすぐ下に伸びるといった描き方——は基本的に一致している(図1-2および資料4, 7, 23, 24)。こうした特徴は、キリストの真の肖像画の印として、意図的な模写によって伝えられたものであると考えられる。そして、その有力な根拠となったと考えられるのが、6世紀に発見されたマンディリオンのキリスト像である。

このマンディリオンは、イギリスのビザンティン学者スティーヴン・ランシマンによると、コンスタンティノポリスを占領していたラテン帝国の皇帝ボードワン二世(在位1240-1261)によって、フランス王サン・ルイに売却されたとされ、その後しばらくパリのサント・シャペルで保管されたが、フランス革命の際に略奪され、失われてしまったという。

主要参考文献: 鐸木道剛、定村忠士『イコン——ビザンティン世界からロシア、日本へ——』毎日新聞社、1993年。



【図1】
「マンディリオン」ロシア、1637年
ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵



【図2】
「キリスト」モザイク壁画、1321年
イスタンブール、カリエ・ジャーミ
(提供: 東北学院大学教授 鐸木道剛氏)



6.

聖三位一体（複製）

The Trinity (Copy)

アンドレイ・ルブリョーフ

西南学院大学博物館蔵

原資料：アンドレイ・ルブリョーフ

《聖三位一体》ロシア、15世紀初頭

板、テンペラ、142×114cm

モスクワ、トレチャコフ国立美術館蔵

ロシアでは、内陣と聖堂の最奥にある至聖所とを区切るイコノスタシス（祭壇障壁）が誕生した。イコノスタシスは「イコンを立てる」の意であり、そこには複数のイコンが何段にも並べられている。ルブリョーフの《聖三位一体》も、およそ500年間、モスクワ近郊のトロイツ・セルゲエフ修道院にある聖堂内部のイコノスタシスに掛けられていた。なお、「三位一体」とは、「父と子（キリスト）と聖霊」とが、「同一の実体・本質」であり、そこには「三つのヒュボスタシス（位格）」がそなわっているというキリスト教の教義を指す。「三位一体」の図像表現の一つとして、アブラハムと妻サラが三人の客人を迎える場面（創世記 18, 1-15）が描かれる。しかし、ルブリョーフはこうした物語的な場景描写から離れ、「父と子と聖霊」を象徴的に三人の天使の姿として描いている。ルブリョーフのこのイコンは、後世の画家たちの手本として、繰り返し模写されてきた。（宮川）



7.

キリスト（複製）

Christ (Copy)

アンドレイ・ルブリョーフ

西南学院大学博物館蔵

原資料：アンドレイ・ルブリョーフ

《キリスト》ロシア、15世紀初頭

板、テンペラ、158×108cm

モスクワ、トレチャコフ国立美術館蔵

イコノスタシスの中核をなすのが、デイシスの段である。そこには、キリストを中心に、聖母マリア、大天使たち、聖パテロ、聖パウロ、そしてその他の聖人たちが描かれている。デイシスは「嘆願」という意味で、聖母マリアや聖人たちが、イエス・キリストに人類の救済を嘆願する様子を描いたイコンであり、その図像は5-6世紀にビザンティン帝国で確立した。このキリストのイコンが描かれたデイシスは、少なくとも7つのイコンで構成されていたと考えられている。このうち現存するのは、中央のキリスト、大天使ミカエル、そして聖パウロのイコンである。この作品は、モスクワの西にある町、ズヴェニゴロドのウスペンスキー大聖堂にあったものと考えられている。（宮川）

II

イコン——祈りのかたち

イコン（聖像画）は、ギリシア、ロシア、そして東ヨーロッパの国々など、東方正教会の祈りに関して崇敬されてきた。人々は、イコンの前で十字を切り、それに接吻する。「イコン」という言葉は、「似像」・「写し」を意味するギリシア語の「エイコン（εἰκών）」に由来する。本章で見るように、イコンは模写の芸術である。それは、イコンが受肉した神の言（ロゴス）たるイエス・キリストの「似姿」として写されていったことに拠る。なお、明治期の日本において、イコンを学ぶため、ロシアに派遣されたのが山下りんであった。山下りんのイコンは当時のロシア・イコンの忠実な模写である。現在、日本の正教会で見られるイコンは、そのほとんどが将来されたロシア・イコンと山下りんが描いたイコンの二種類である。聖なる写しとも言うべきイコンの美は、祈りのかたちを示している。

1節 ウラジーミルの聖母——聖なる写し

《ウラジーミルの聖母》はロシアで最も重要なイコンである。ビザンティン伝来のこのイコンは、12世紀のはじめにコンスタンティノポリス（現イスタンブール）からキエフにもたらされたと伝わる。その後、1155年にロシア東北部のウラジーミルへ移され、1395年以来、長くモスクワの地で崇敬されてきた。モスクワの年代記には、このイコンが起こした奇跡の数々が語られている。奇跡を起こすイコンとして深く崇敬される《ウラジーミルの聖母》は、今日まで連綿と模写されてきた。原品はロシアの至宝として、モスクワのトレチャコフ国立美術館に置かれている。12世紀の部分は聖母マリアとキリストの顔の部分を残すのみであるが、ビザンティン中期後半のコムネノス朝美術の優れた様式を伝えている。



8.

ウラジーミルの聖母（複製）

Theotokos of Vladimir (Copy)
西南学院大学博物館蔵

原資料：12世紀
板、テンペラ
104×69cm
モスクワ、トレチャコフ国立美術館蔵

聖母子のイコン——聖母の庇護とその拡がり

福音書記者ルカが描いた聖母子像

「キリストのイコン」と共に、篤い崇敬を受けているのが「聖母子のイコン」である。聖書のある個所においてマリアは、イエスから「女よ」と呼びかけられる普通の母親である。しかし、431年のエフェソス公会議以降、マリアは「神の母」、すなわち「生神女（テオトコス）」として敬われるようになった。

そして、450年頃、コンスタンティノポリス（現イスタンブール）に聖母のための三つの聖堂——ブラケルネ聖堂、カルコプラティア聖堂、そしてホデゴン聖堂——が建てられた。このうち、ホデゴン聖堂に納められた聖母子のイコンは、その聖堂の名にちなみ、「ホデゲトリアの聖母」として崇敬されていった。この「ホデゲトリアの聖母」をめぐるのは、福音書記者ルカが聖母の昇天後に記憶をたよって聖母子の像を描き、聖母自身がそのイコンを見てルカを祝福したと伝えられている。これが聖母子のイコンの「原型」である。「原型」のいわば印を写すために、画家はそれをそのまま模写する。かくして、福音書記者ルカが描いたイコンを原型として聖母子像が複製されてゆく。

奇跡を起こすイコン

コンスタンティノポリスでは、「ホデゲトリアの聖母」のイコンを用いた儀礼が行われていた。その儀礼は、二つの異なる行事から構成されていたとされる。儀礼の一つは宗教行列であり、火曜日の朝にイコンは行列に携えられ、人びとの前を練り歩いた。そして、もう一つは「ホデゲトリアの聖母」を用いた奇跡の演出であった。それは、選ばれた一人の男が、非常に重い「ホデゲトリアの聖母」のイコンを軽々と持ち上げて肩に載せ、市場の広場の周りを繰り返し巡るといったものであった。

これらの儀礼は、626年にコンスタンティノポリスで起こった包囲戦の「典礼的かつイコン的再現」であった可能性がある¹と指摘されている。伝承によると、この年、コンスタンティノポリスは聖母と「奇跡を起こすイコン」の執り成しによって救われたという。火曜日の儀礼の基本的要素は、ホデゲトリアの聖母を担いだ男が、市場の広場の周りを繰り返し円環上に動く、という点にあったが、これについては、包囲戦についての物語中に明らかな類似が見出される。すなわち、包囲戦の際に、奇跡を起こすイコンを携えた行列がコンスタンティノポリスの城壁の周りを巡ったのであった。そして、このイコンは「ホデゲトリアの聖母」と同一視されるようになったのだが、「ホデゲトリアの聖母こそ、この町の奇跡的な救い主」と考えられるようになったのである。

さらに、注目すべきは、奇跡を起こすイコンを用いたこのような儀礼が、その他の都市や地域においても、複製によって再現されていたという点である。たとえば、ビザンティン帝国第二の都市テッサロニキでは、奇跡を起こす「ホデゲトリアの聖母」の複製が崇敬を集めていたという。

ホデゴン聖堂のイコンは、1453年にコンスタンティノ

ポリスがオスマン・トルコに占領された際、四つに分断されて破壊され、永遠に失われたという。しかし、複製された「ホデゲトリアの聖母」がそれぞれ別の場所で新たに奇跡を起こしてゆく。

ウラジーミルの聖母——モスクワの守護イコン

1453年に、コンスタンティノポリスが陥落し、ビザンティン帝国が滅亡した後は、東方キリスト教の中心はモスクワに移った。ビザンティン教会によるロシアへのキリスト教の布教は9世紀に遡る。そして、988年のウラジーミル公の受洗によってロシアの最終的なキリスト教化が為された。ちなみに、『原初年代記』によれば、ウラジーミル公は受洗を決意する前に、コンスタンティノポリスに使節を派遣し、その報告を聞いてビザンティンのキリスト教を受け入れたという。それは「聖ソフィア大聖堂での礼拝に参加していると、まるで神の国にいるかのごときであった」という内容の報告であった。こうして、首都のキエフには、聖堂の建築や壁画の制作および指導のためにコンスタンティノポリスから建築家や画家が招かれ、コンスタンティノポリスに倣って聖ソフィア大聖堂が建設された。

そして、12世紀のはじめに制作された一つの聖母子のイコンがロシアの地にもたらされた。それは後に「ウラジーミルの聖母」と呼ばれるようになるビザンティン伝来のイコンである。このイコンは、まずキエフにもたらされ、1155年にウラジーミルに運ばれた後、1395年にモスクワに移された²とされる。その後、1919年までモスクワのウスペンスキー大聖堂に置かれていたが、修復された後、現在はトレチャコフ国立美術館に置かれている。

「ウラジーミルの聖母」は東方キリスト教世界の新たな首都となったモスクワの守護イコンとなり、幾度となくその奇跡の力により国を救ったと伝えられる。そして今日まで、この慈愛に満ちたこの聖母子像は、ロシアの画家たちの手本として連綿と模写されてきたのである。

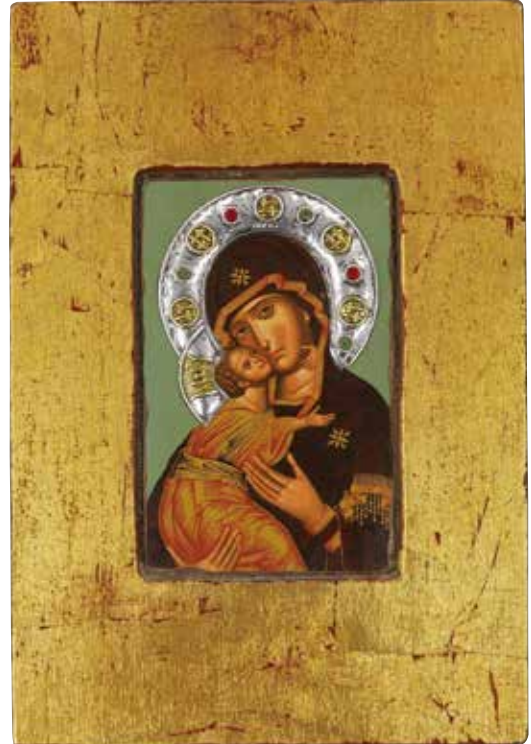
1 アレクセイ・リドフ「空間的イコン—コンスタンティノポリスにおけるホデゲトリア・イコンによる奇跡の儀式」秋山聰訳（秋山聰、尾崎彰宏編『西洋美術研究 No. 15 特集=聖俗のあい』三元社、2009年、所載）。



9.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
板、テンペラ、ガラス、打ち出し
個人蔵



10.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
板、テンペラ、ガラス、打ち出し
個人蔵



11.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
板、テンペラ、打ち出し、個人蔵

聖母子の左右に記された文字「MP ΘΥ」は、「MHTHP ΘΕΟΥ(メーテール・テウー)」、すなわち「神の母」を意味する銘文である。「キリスト」を指す「IC XC」や聖人名の銘文は、描かれた聖人が間違いなくその聖人であることを保証し、その肖像性を裏付ける印である。



12.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
板、テンペラ、個人蔵



13.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
陶板、個人蔵



14.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
陶板、打ち出し、個人蔵



15.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir
陶板、打ち出し、個人蔵



16.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir

ウラジーミル・クリロフ

パレフ（ロシア）、2000年、板、テンペラ

個人蔵

中部ロシアのパレフ村は、伝統的なイコン制作の地として知られている。言い伝えによれば、14世紀頃、一人のイコン画家がこの地に来てイコンを描き始めたと言われる。後に、この村のイコンはパレフ派のイコンと呼ばれるようになる。パレフ派のイコンには、中世の最も洗練された様式が受け継がれていると言われ、繊細なミニアチュール風の特徴を持つ。（宮川）



17.

ウラジーミルの聖母

Theotokos of Vladimir

白石孝子

日本、20～21世紀、陶板、アクリル

個人蔵

白石氏は岡山にアトリエを構え、イコンの制作を行っている。本資料は、陶板にアクリル絵の具で描かれたものである。これは、湿度の高い日本の風土に合わせて考案された手法である。聖堂改修に伴い、2015年に新たに設置された人吉ハリストス正教会のイコノスタシスは白石氏によるものである。（宮川）

2節 イコンと素材——物質の聖化

イコンには、キリストや聖母子、そして諸聖人の肖像のほか、キリストの生涯や聖母マリアの生涯などを表した物語場面が描かれる。それらは、主に板に卵白を溶剤とするテンペラ絵の具で描かれるほか、象牙板や真鍮、また金属板を打ち出したものなど、その素材や技法は様々である。また、20世紀になると複製技術の発展により、複製画イコンが広く流布するようになるが、イコン本来の意味からすれば、複製画のイコンも板に描かれたイコン同様にイコンとしての価値を有している。なぜなら、イコンは写されることを前提としており、板に描かれたイコンも複製画もそれ自体は「物質」であって、祈りの対象ではないからだ。しかし、受肉の神秘——「神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿った」（ヨハネ福音書1,14）——は物質が聖なるものを宿す器ともなりうることを証している。人々は、イコンの前に祈り、観想し、その原型へと思いを馳せるのである。



18.

聖母の庇護

Intercession of the Virgin Mary

ロシア、18世紀、板、着色

西南学院大学博物館蔵



19.

聖ボニファティオスと聖アナスタシア

St. Bonifatius of Tarsus and St. Anastasia
ロシア、19世紀、板、着色
西南学院大学博物館蔵



20.

聖ワシーリーと聖ヨハネス・クリュソストモス

St. Basil the Hermit and St. Joannes Chrysostomos
ロシア、19世紀、板、着色
西南学院大学博物館蔵



21.

キリストの鞭打ち

Flagellation of Christ
ロシア、板、着色
西南学院大学博物館蔵



22.

東方三博士の礼拝

Adoration of the Magi
ロシア、19世紀、真鍮
西南学院大学博物館蔵



23.

全能者キリスト

Christ Pantocrator

ギリシア、20～21世紀、板、着色

西南学院大学博物館蔵



24.

全能者キリスト

Christ Pantocrator

ロシア、20～21世紀、打ち出し

西南学院大学博物館蔵



25.

カザンの聖母

Our Lady of Kazan

20～21世紀、額装

西南学院大学博物館蔵



26.

ズナメニエの聖母

Our Lady of the Sign (Znamenie)

ロシア、20～21世紀、額装

西南学院大学博物館蔵

3節 19世紀ロシア・イコンと山下りん

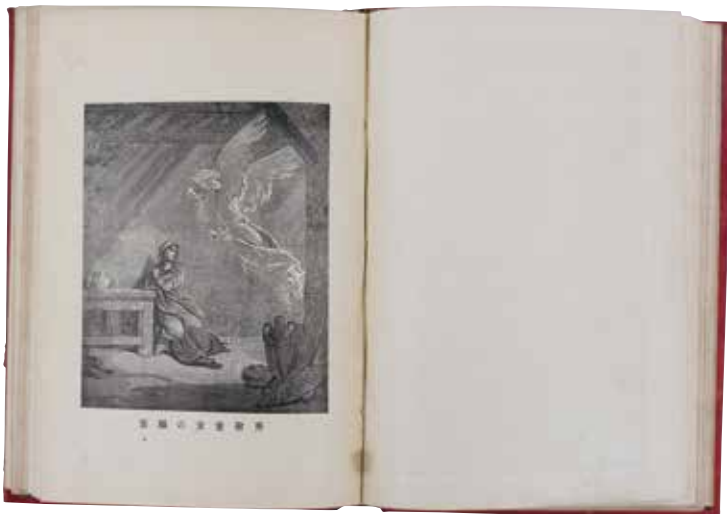
ビザンティンで生まれ、ロシアに受け継がれたイコンは、明治期の日本に辿り着いた。明治日本の唯一のイコン画家である山下りんは、ロシアからの伝道師ニコライの命でロシアに派遣され、ペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活女子修道院において1881年から2年間の修練を積んだ。帰国後、山下は日本全国で建設が始まっていた正教会の聖堂のためにイコンを制作した。彼女のイコンはすべて、当時のロシア・イコンの忠実な模写である。



山下りん (1857-1939)

常陸国(茨城県)笠間生まれ。浮世絵など日本画を学んだ後1875年に油彩画に転じ、77年工部美術学校に入学。78年、ハリストス正教会の洗礼を受け、ニコライ主教の命によりロシアに派遣され、ペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活女子修道院に81年から2年滞在した。帰国後しばらくは版画技術を生かして教会を離れて制作しようとしたが、教会に復帰し、89年からはイコン制作の記録が残っている。以後、30年近く駿河台の女子修道院内に住んでイコンを制作、1917年のロシア革命の翌年に笠間に帰郷した。

山下りん肖像写真(26歳)
1883年7月撮影(山下りん旧蔵)
(提供:柳澤幸子氏)



27.

正教小画帖

Small Pictorial Orthodox Christianity Handbook
日本、1902(明治35)年、書冊
西南学院大学博物館蔵

正教会の暦では、12の重要な祭日が定められ、これを十二大祭として祝う(24頁参照)。山下りんの受胎告知のイコンは、ビザンティン以来描かれてきた十二大祭のイコンの一枚である。この図柄のイコンは、十二大祭のイコンの一枚として、函館、札幌、上武佐、一関、福島教会にあり、単独のイコンとしては京都、一関、曲田の教会にある。ここでは、ドレの聖書挿絵(*La Sainte Bible selon la Vulgate*, Tour, 1866)の図柄が用いられている。その図柄は19世紀後半のロシアを含むヨーロッパ全域そしてアメリカにおいて広く知られており、明治期の日本において出版された『旧新約聖經画帖』(明治34年)にもドレの聖書挿絵が転載されている。『旧新約聖經画帖』の「緒言及び注意」には、「帖中の原画は、重に、「キエフの垂使徒 聖候ウラジミル聖堂の画帖」、サンクトペテルブルグに於るシドルスキイ十一版の『舊新約歴史教科用の聖画』、ライプチヒ刊行のユリス シュノル フォン カロルスフェルトの『聖經画集』及びグスターフ・ドーレの「繪入聖經」等、其他の者より採れり。」とある。本資料は、この翌年に出版された縮小版であり、その緒言には先に出版された『旧新約聖經画帖』の好評を受け、この小画帖をもってその需要に供すると記されている。(宮川)

【参考】

山下りん『至聖生神女の福音』(受胎告知)
(提供:上武佐ハリストス正教会 撮影:中村治氏)

山下りんとイコン——祈りのかたちを見つめて

1880年、一人の女性の画学生がイコン画家となるべく単身ロシアに渡った。日本における最初のイコン画家、山下りんである¹。今日、わが国の正教会で見られるイコンのほとんどが、ロシアからもたらされたイコンか、山下りんの制作したイコンかのどちらかであるとされる。

山下りんはペテルブルグで、ラファエロやゲイド・レーニといった西欧の伝統的なアカデミズムの宗教画に接している。当時、ロシア・イコンは西欧カトリックの宗教画の影響を強く受けており、油彩のイコンが主流であった。現に、山下りんがイコンを学ぶために1881年春から滞在していたペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活女子修道院には、帝室美術アカデミーの学長であったフォードル・イヴァノヴィッチ・ヨルダン(1800-1883)が画教師として来ていた。ヨルダンは版画彫刻の専門家であるが、彼はラファエロの《変容》の複製版画によってアカデミーの教授資格を得ていた。山下りんの作品には、ラファエロの《聖母戴冠》の模写をはじめとし、ヨルダンの指導によると思われるものが多く残されている。また、彼女はエルミタージュ美術館でイタリアのボローニャ派の画家ゲイド・レーニの《聖ヒエロニムス》など3点の模写を行っているが、そこにもヨルダンが同行している。

こうしたアカデミズムにおける画学学習は、イコン制作とも矛盾しないものであった。もとより、西欧カトリックの図像のロシア・イコンへの影響は、17世紀のイコン画家ウシャコフ(Simon Ushakov 1626-86)以来著しく、18世紀からはピョートル大帝による上からの強力な西欧化がイコンにも大きな影響を及ぼしていた。さらに、皇帝ニコライ1世(在位1825-55)の時代にはボローニャ派の宗教画が好まれていた。

こうしたロシア・イコンにおける西欧カトリックの宗教画の影響は、身近なところにも見られる。たとえば、東京のニコライ堂のイコンには、ラファエロのドレスデンにある《シストの聖母》が流用されている。また、高清水の教会にも、ラファエロの《小椅子の聖母》がイコンとなっている例がある。このような西欧カトリックの宗教画のイコンへの流用は、ウクライナやセルビアにも見られるという。

山下りんは、こうした時代のロシア・イコンに学び、それを忠実に模写している。帰国後、彼女は日本全国で建設が始まっていた正教会の聖堂のためにイコンを制作した。現在日本全国の正教会の教会堂にあるイコンのうち、山下の作品と考えられるものは、70の図柄、約300点が確認されているが²、これらのイコンには署名と制作年が記されていないため、その全体像はまだ不明である。

ただし、署名と制作年が記された唯一の例外が遺品にある。それは、《ウラジーミルの聖母》を写した、縦15.1cm、横12.1cmの板に油彩で描かれた小さなイコンである。その裏には墨で、「一千九百一年十二月上旬写 イリナ山下里舞女」と記されている。山下は、ロシアで最も尊ばれてきたこのイコンを、恐らく何らかの複製によって写したのと考えられるが、ただ一つ署名と制作年を記してイコンを写したのには、何か個人的な動機があったのではないかと指摘されている³。彼女はこの小さなイコンを自らのために描

き、最後まで手元に置いていたという。

山下りんのイコン画家としての生はきわめて慎ましかであったという。彼女は留学経験を誇って洋装で写真を撮ることもなく、教会の基幹雑誌に留学体験の記事を書くこともなかった。ロシア革命の翌年の1918年には郷里の笠間に戻り、絵筆を捨てたという。

山下りんが描いたのは、ルネサンス以来の近代的な芸術観の元にある宗教画の図像であった。しかし、模写に徹するその姿勢と署名を記さない無名性とは、ビザンティン時代に遡る中世的な芸術観に支えられている。すなわち、山下りんは、伝統的なアカデミズムの宗教画を通して西欧近代に触れ、また同時に、「模写」と「無名性」という点において、ビザンティン以来受け継がれてきたイコンの伝統に出会い、それを担っているのである。それゆえ、山下りんのイコンは、名もなき修道士たちの「祈りを中心とした生」と共にあり、祈り・典礼と同じように、時と処とを超えて受け継がれてきた「祈りのかたち」でもある。山下りんは無名であることを望む、中世的な画家であった。

主要参考文献：鐮木道剛、定村忠士『イコン——ビザンティン世界からロシア、日本へ——』毎日新聞社、1993年。
『山下りんとその時代』展カタログ、千葉市美術館ほか、1998年。

1. 山下りんのイコンをめぐるのは、東北学院大学教授 鐮木道剛氏の研究に詳しい。鐮木氏は1985年以来山下りんのイコンを調査し、30年以上にわたって山下りんのイコンに関する論文を発表されてきた。本稿は、鐮木氏の論文「山下りんと中世イコンとの出会い」(初出『山下りんとその時代』展カタログ、千葉市美術館ほか、1998年)に負うところが大きい。
2. 『山下りんとその時代』展カタログ、p. 55。
3. 帰国直後に彼女はペテルブルグへなつかしさのこもった手紙を書いているが、それから18年を経て『ウラジーミルの聖母』が描かれている。彼女は若き日の思い出をロシアを象徴する「ウラジーミルの聖母」に託しているのではないかと指摘されている。(鐮木道剛「山下りん研究の問題点一たとえば横山松三郎の存在」『岡山大学文学部紀要』第八号、1987年12月。)



ロシア・イコン
《ウラジーミルの聖母》
制作年不詳、奥玉ハリストス正教会
(提供：奥玉ハリストス正教会)



イコン・カード
《ウラジーミルの聖母》
(山下りん旧蔵) 10.0×8.5cm
柳澤幸子氏蔵(提供：柳澤幸子氏)



山下りん《ウラジーミルの聖母》
1901(明治34)年
板、油彩、15.1×12.1cm、
柳澤幸子氏蔵(提供：柳澤幸子氏)

III

祈りの拡がり——日本と正教会

1549（天文18）年、西方キリスト教カトリックであるイエズス会によって日本にキリスト教が伝来する。しかし近世になるとキリスト教は邪教として禁止になり、東方キリスト教が日本に伝来するのは開国以後となった。日本において正教会の歴史は亜使徒聖ニコライによって函館より始まる。聖ニコライは積極的に布教活動を行い、多くの経典を翻訳した。聖ニコライが翻訳した経典は現在でも祈りの際に使用されている。本章では、日本における東方キリスト教の受容と普及について紹介する。

1節 聖ニコライによる布教活動

1861（文久元）年、日本に正教の教えを布教するためロシア領事館付司祭として函館に降り立った。この地で後の正教徒となる仙台藩士らと出会い、日本正教会の礎を築いていく。東京に本拠地を移した聖ニコライは、キリスト教解禁後本格的に布教活動を開始した。聖ニコライは各地に伝教者を派遣し、正教の教えを日本全国に広めていく。



亜使徒聖ニコライ
（提供：宗教法人日本ハリストス正教会団）

亜使徒聖ニコライ（1836-1912）

イヴァーン・ドミートリエヴィチ・カサートキン
Иван Дмитриевич Касаткин

スモレンスク、ペリョーザ村生まれ。1860（万延元）年24歳でペテルブルク神学大学卒業後修道司祭となり、翌年ロシア領事館付司祭として函館に来日。キリシタン禁制が解かれていない1868（明治元）年に、パワエル澤邊琢磨をはじめとする3人を秘密裏に洗礼した。1869（明治2）年にロシアへ一時帰国し、日本伝道会社を設立。その後、1871（明治4）年に上京し、1880（明治13）年に主教に叙聖される。新約聖書を初めとする多くの奉神礼書の翻訳を行い、正教の宣教に尽力した。1912（明治45）年永眠。明治天皇より外国人に対して異例である恩賜の花輪が与えられた。1970（昭和45）年、ロシア正教会により亜使徒（使徒に等しい働きをした者）として列聖された。



大日本正教会略図』1892（明治25）年
（提供：宗教法人日本ハリストス正教会教団）

正教会では人々に正教の教えを伝える役職である伝教者がいた。明治初期の伝教者は旧仙台藩士が多く東北地方を中心に布教活動を行っていた。このため、東北地方特に太平洋側では現在でも多く教会が残っている。1874（明治7）年全国公会が始まり「伝教規約」が定められると、毎年伝教者は東京本部より派遣先を告げられ、各任地にて伝教に励んだ。1902（明治35）年の全国公会での報告では、教会数260、伝教者145人、信徒27,245人であった。伝教者が日本全国へ布教していった様子が伺える。しかし、九州にはそれほど広まらず、教会数16、信徒616人と小規模であった。

28.

魯西亞国条約並税則

Treaty of Amity and Commerce
between Japan and Russia
日本、江戸時代後期、書冊
西南学院大学博物館蔵

江戸幕府が1858（安政5）年にロシアと締結した
修好通商条約。その内容は両国で領事裁判権を
認めるが日本の関税自主権は認めない、といった不
平等条約であった。幕府はロシアの他に、アメリカ・
イギリス・フランス・オランダと同様の条約を結んで
いる。この条約により、函館にロシア領事館と小さな
聖堂が設置された。当時聖ニコライは神学生であり、
ゴロウニンの『日本幽囚記』を読み日本の国民性
や道徳を学び、日本へ正教の伝道を強く願っていた。
その折に函館領事館付司祭の求人を見つけ、日本
へ上陸することになる。（中禮）

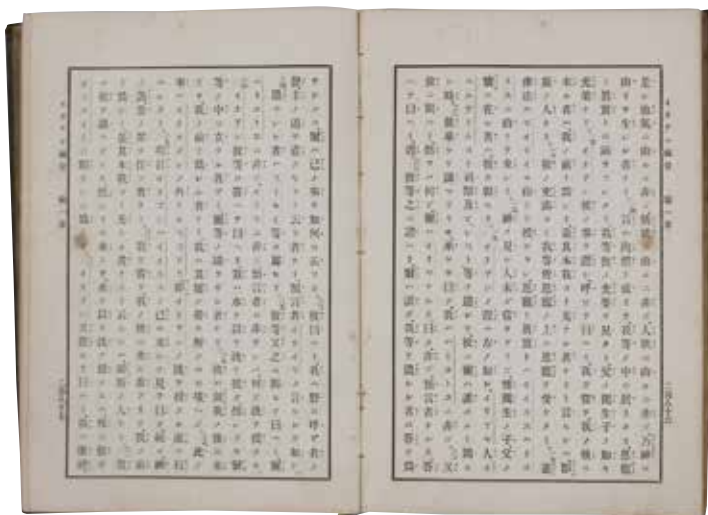
※展示は8月31日（金）まで



29.

我主イイススハリストスノ新約

New Testament
日本、1901（明治34）年、書冊
西南学院大学図書館蔵



イイスス・ハリストスとはイエス・キリストのギリシア語
読みである。聖ニコライと正教会の信者で儒学者
であったパウエル中井木菟麿が新約聖書の翻訳を
行った。彼らが本格的に翻訳作業に着手したのは
1895（明治28）年であり、毎日午前7時半から
12時まで、午後6時から9時まで従事した。ギリ
シア語版、ラテン語版、教会スラヴ語版、英語版、
フランス語版、ドイツ語版、漢訳版、明治元訳聖
書などを参考にしながら翻訳を進めていき、著名な
国語学者より意見や資料を集め、繰り返し校訂を行
い約7年の歳月をかけ1901（明治34）年に発行
された。このニコライ訳聖書は、ギリシア語原典のも
っとも忠実な翻訳書として評価されている。当時発行
された正教会の経典は漢語体で訳されており、や
や難解であるといわれてきたが、これに対して聖ニコ
ライは「わたしは、福音書や奉神礼用諸書の翻訳
が大衆の教育程度まで降りてゆくべきではなく、逆に、
信者たちが福音書や聖体礼儀用諸書のテキストを
理解できるところまで昇ってゆくべきだと考えている
のです。」と、述べている。（中禮）

絵入通俗正教自修書

Pictorial Orthodox Christianity Handbook

日本、1904（明治37）年、書冊
西南学院大学博物館蔵

本資料は1898（明治31）年7月から1900（明治33）年11月にかけて刊行された出版物の合冊であり、造物主や天使と悪魔といった旧約聖書の内容や、ハリストス降誕、ハリストス復活といった新約聖書の内容を絵と共に解説をしている。端書には「聴教者並信者等に教理並歴史の綱領を知らしむる為」とあり、正教会が信者のみならず広く正教の教えを伝えようとした意図が伺える。（中禮）



東京復活大聖堂（ニコライ堂）

1891（明治24）年、東京の駿河台に「復活大聖堂」と名付けた大聖堂が完成した。この聖堂の完成には、聖ニコライの多大な苦勞があった。

当時、日本での布教活動はロシアからの寄付金によって賄われており、聖堂の建築に多額の費用をかけることに対して、日本人の教会関係者から反対が起こった。充てられた資金は聖堂建築のためとして寄附されたものであったため、後に和解するものの、一時は深刻な対立にまで発展していたことが聖ニコライの日記よりうかがえる。また、教会関係者以外からも建設に対して反対があり、「宏大なる痰瘤」¹などと新聞で報じられることもあった。

しかし、完成後、実際に聖堂を目の当たりにした人々は荘厳で美しい建物に驚嘆したのであろう。東京の名所として様々な案内書のなかで取り上げられていくことになる。例えば、『東京遊行記』²には、「東京に教会堂すくなからざれども、かばかり偉大なるものは、他に其比を見ず。ニコライを堂に呼びて、東京見物の一に数へらるゝもの也。」と紹介され、受け入れられていった。

聖堂建築は現在だけではなく未来の教会の発展のために必要であるとした聖ニコライ。彼によって建立された「東京復活大聖堂」は、関東大震災や戦争などの困難を経て、現在も日本正教会の総本山として人々に親しまれている。

- 1 『東京朝日新聞』1888（明治21）年11月20日
- 2 大町桂月『東京遊行記』大倉書店、1906（明治39）年



東京復活大聖堂（提供：宗教法人日本ハリストス正教会教団）

2節 日本ハリストス正教会の祈り

聖ニコライが伝えた正教の教えは、現在にかけて受け継がれている。正教会で行う祈りの総称を奉神礼といい、その中でも聖体礼儀は最も中心的な祈りである。正教徒は聖体礼儀を含めた教会で行う公祈祷と、自宅で行う私祈祷で神に祈りを捧げ奉神礼書は明治期に漢語調で翻訳され、現代においても使用されている。ここでは、聖ニコライらによって翻訳された奉神礼書の一部と、正教会において重要な祭日である十二大祭について紹介する。

奉神礼書一覧

ふくいんけい 福音経	四福音書をまとめて一冊にしたもの
しとけい 使徒経	使徒行実と使徒の手紙を一冊にしたもの
せいまいけい 聖詠経	聖詠（詩編）を一冊にまとめたもの
じかけい 時課経	時課の祈りをする時に用いるもの
はちちようけい 八調経	時課で用いる第一調から第八調までの祈祷文
さいじつけい 祭日経	祭日の時に用いる奉神礼書
さんかさいけい 三歌斎経	大斎準備週、大斎、受難週の期間に使用する書
ごじゅんけい 五旬経	復活大祭から五旬祭の期間に使用する書
れんせつかしゅう 連接歌集	主にイルモスと呼ばれる祈祷文をまとめたもの
ほうじけい 奉事経	時課や聖体礼儀のために司祭が用いる書
せいじけい 聖事経	機密やその他の祈祷のために司祭が用いる書
げっかけい 月課経	毎日の聖人や祭のためにまとめられた奉神礼書

(参考：『正教会の手引』)



翻訳を行った聖ニコライとパウエル中井木菟麿
(提供：宗教法人日本ハリストス正教会教団)



31.

聖詠経

Hymn's prayer book

日本、1885（明治18）年、書冊

西南学院大学図書館蔵

聖詠と呼ばれる旧約聖書の讚美の詩を収めた祈祷書。日本聖書協会訳の詩篇に当たるが日本聖書協会訳はヘブライ語聖書を、正教会は七十人訳聖書に基づいているため、表現の異なる箇所がある。20の「カフィズマ」で区分され、全150篇からなり、公祈祷・私祈祷問わず、奉神礼で使用される。この經典の翻訳も聖ニコライとパウエル中井が行った。（中禮）

32.

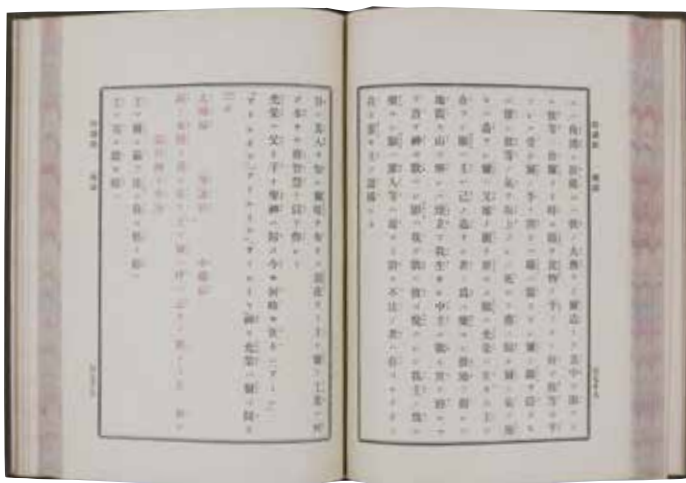
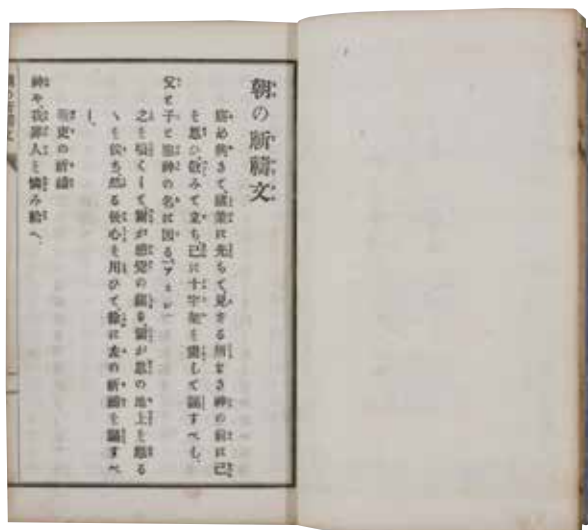
小祈祷書

Small prayer book

日本、1884（明治17）年、書冊

西南学院大学博物館蔵

正教徒が家などで私祈祷を行うときに使用する祈祷書。中身は「聖体礼儀」など教会で行う公祈祷の際に使用する奉神礼書より引用・編集されており、古い漢語調の日本語である。難解な漢語調を用いることで、言葉のリズムや言語に近い翻訳を大切にしている。正教徒はこのような定型祈祷文（正教会では祝文と呼ばれる）を読み、自らの心を合わせ、神に祈りを捧げる。（中禮）



33.

時課経

Book of hours

日本、1884（明治17）年、書冊

西南学院大学博物館蔵

時課と呼ばれる一日を八つに分けて祈る時に使用する祈祷書。正教会はユダヤ教と同じく夕方（午後6時頃）から一日が始まる。時課の内容は、聖詠や祈祷文を読んだり歌ったりしている。しかし、現代においては時間ごとに祈るのではなく、一度にまとめて行われることが多いが、主日（日曜）や祭日の前の晩には「晩課」「早課」「一時課」をまとめて「徹夜禱」と称して行い、翌朝に「三時課」（「六時課」の場合もある）と「聖体礼儀」を行う。（中禮）

時課一覧

	現在の時間	テーマ
晩課	夕方6時頃	天地創造と陥罪とハリストスに到来
晩堂課	夜の9時頃	痛悔
夜半課	深夜0時頃	最後の審判
早課	早朝3時頃	起床への感謝、神への賛美
一時課	朝の6時頃	ハリストスの裁判
三時課	朝の9時頃	十字架刑、聖神降臨
六時課	正午12時頃	十字架上のハリストス
九時課	昼の3時頃	ハリストスの死

（参考：『正教会の手引』）

十二大祭

正教会の暦では復活祭に加え、十二の重要な祭日がある。これを「十二大祭」とし、特別な典礼を行う。「十二大祭」のほかにも申祭や小祭などがあり、聖書や聖人、教会の歴史に関わる出来事を記憶している。固定祭は9月が年の始まりである。



①生神女誕生祭

旧暦9月21日、新暦9月8日

生神女マリヤの誕生を「救いの始め」として祝う。



②十字架挙栄祭

旧暦9月27日、新暦9月14日

ハリストスがかかった木の十字架の発見を記念する。



③生神女進堂祭

旧暦12月4日、新暦11月21日

後に神の宮となるマリヤが3歳の時に神殿に献じられた祝い。



④主の降誕祭

旧暦1月7日、新暦12月25日

イイス・ハリストスの誕生・神の籍身(受肉)を祝う。



⑤主の洗礼祭(神現祭)

旧暦1月19日、新暦1月6日

ハリストスの洗礼と至聖三者の神の顕れを祝う。



⑥主の迎接祭

旧暦2月15日、新暦2月2日

生後40日目のイイスが神殿に連れていかれたことの記念。



⑦生神女福音祭

旧暦4月7日、新暦3月25日

一般に「受胎告知」と言われるもの。マリヤの従順さを尊む。



⑧聖枝祭

復活祭の日付と共に毎年移動する。

ハリストスがロバに乗ってエルサレムに來たことを祝う。



⑨主の昇天祭

復活祭の日付と共に毎年移動する。

ハリストスが復活後40日目に昇天されたことを祝う。



⑩五旬祭

復活祭の日付と共に毎年移動する。

五旬祭の日に聖神が使徒たちに降り、教会が誕生したお祝い。



⑪主の変容祭

旧暦8月19日、新暦8月6日

ハリストスが山の上で光榮の姿を顕したことを祝う。



⑫生神女就寝祭

旧暦8月28日、新暦8月15日

マリヤが永眠し、復活の先取りをしたことを祝う。

参考：『正教会の手引』

図版は山下りんが描いた十二大祭のイコン(提供:上武佐ハリストス正教会 撮影:中村治氏)である。山下による十二大祭のイコンの揃いは、上武佐、札幌、函館、一関、福島(ただし《昇天》を除く)の各教会にある。

日本ハリストス正教会関連年表

1855年 (安政2年)	12月、日露和親条約締結。函館、下田、長崎開港。
1859年 (安政6年)	箱館上大工町 (現在の函館市元町) に「救主復活聖堂」完成。
1861年 (文久元年)	6月、聖ニコライ、箱館に渡来。
1867年 (慶応3年)	10月、大政奉還。
1868年 (慶応4年) (明治元年)	4月、日本人初の正教徒 (パウエル澤邊琢磨、イオアン酒井篤礼、イアコフ浦野大蔵) 誕生。 9月、明治と改元する。 10月、函館戦争始まる。
1869年 (明治2年)	聖ニコライ、一時帰国。 5月、箱館戦争終結。 6月、版籍奉還。
1870年 (明治3年)	澤邊の呼びかけに応じて仙台藩士箱館に到来、澤邊宅に集まり聖書の研究を始める。
1871年 (明治4年)	2月、聖ニコライ、掌院となって再来日。イオアン小野莊五郎、イアコフ高屋仲、笹川定吉ら受洗 (10月～11月)。
1872年 (明治5年)	1月、聖ニコライ、函館の教会をアナトリイ神父に任せて上京、築地に居を定め、布教活動を始める。 9月、聖ニコライ、駿河台紅梅町 (現在ニコライ堂のある場所) に移転。 太政官布告により、12月3日を以て明治6年正月元旦となる。
1873年 (明治6年)	2月、切支丹宗禁制の高札撤去される。
1874年 (明治7年)	5月、正教会史上はじめての全国公会が行われ、伝教規則が決まる。この頃正教神学校開設される。
1875年 (明治8年)	7月、全国公会で澤邊琢磨日本人で初の司祭となる。イオアン酒井は輔祭となる。
1877年 (明治10年)	2月-9月、西南戦争。 12月、『教会報知』1号出る (月2回)。
1880年 (明治13年)	3月、聖ニコライ、主教となる。 4月、聖書翻訳委員会中訳『新約聖書』完成。 11月、聖ニコライ、日本に帰国。この月に『教会報知』廃刊、代わって『正教新報』発刊される。
1882年 (明治15年)	4月、駿河台北甲賀に土地を求め、正教神学校と女子神学校と出版局「愛々社」を建てる。
1884年 (明治17年)	3月、東京復活大聖堂 (ニコライ堂) の建設に着手。
1889年 (明治22年)	2月11日、大日本帝国憲法発布。
1891年 (明治24年)	1月9日、不敬事件。 2月、東京復活大聖堂竣工。3月8日、成聖式。 5月11日、大津事件。
1892年 (明治25年)	12月、仙台生神女福音聖堂が成聖。
1901年 (明治34年)	6月、正教会訳『我主イイススハリストスノ新約』刊行。
1903年 (明治36年)	5月、京都生神女福音聖堂成聖式。
1904年 (明治37年)	2月、日露戦争始まる。この時、聖ニコライは正教会の信徒一同に教書を与え、日本国民としての忠義の本分を尽くすよう諭す。 6月、『正教信徒戦時奉公会』発足、『俘虜信仰慰安会』を組織して鈴木九八司祭を松山捕虜収容所に派遣。この頃、正教会への迫害各地に相次ぐ。
1905年 (明治38年)	9月、ポーツマス条約調印、日露戦争終わる。
1906年 (明治39年)	4月、聖ニコライ、大主教となる。
1908年 (明治41年)	6月、主教セルギイ・チホミーロフ来日。
1909年 (明治42年)	8月、大阪の生神女庇護聖堂完成。
1911年 (明治44年)	7月、聖ニコライ渡来50周年記念祭挙行。
1912年 (明治45年) (大正元年)	2月16日、聖ニコライ (75歳) 永眠。セルギイ主教後継者となる。 7月、明治天皇逝去。 10月、『正教新報』765号をもって廃刊となる。 11月、『正教時報』発足。
1914年 (大正4年)	7月、第一次世界大戦勃発。
1917年 (大正6年)	3月、ロシア革命勃発。
1921年 (大正10年)	5月、セルギイ、大主教となる。
1923年 (大正12年)	9月1日、関東大震災。ニコライ堂焼失。 10月、臨時公会で大聖堂の復興決まる。
1927年 (昭和3年)	ニコライ堂復興工事始まる。
1929年 (昭和5年)	12月、同落成、成聖式を営む。
1931年 (昭和6年)	4月、セルギイ大主教、府主教となる。 9月、満州事変。
1939年 (昭和14年)	9月、第二次世界大戦始まる。
1940年 (昭和15年)	4月、宗教団体法施行される。これによって日本人以外の者が宗教団体の首長となるのが出来なくなり、9月、セルギイ府主教は「統理」の地位を追われ、岩沢丙吉が教団の代表となる。この頃、後継主教の選出をめぐる内紛が始まる。
1941年 (昭和16年)	4月、ニコライ小野帰一、陸軍の支援を受けて主教となる。 12月、太平洋戦争始まる。
1945年 (昭和20年)	4月、セルギイ、スパイ容疑で逮捕される。5月、釈放される。 8月10日、セルギイ永眠 (74歳)。同月15日終戦。
1946年 (昭和21年)	4月、臨時公会においてニコライ小野主教の引退が決まり、アメリカの正教会に主教の派遣を申請。
1956年 (昭和31年)	10月、日ソ共同宣言 (ソ連との国交が回復される)。 12月、日本、国連に加盟する。
1969年 (昭和44年)	8月、ロシア正教会とアメリカ正教会の和解交渉が開始。 11月、東京でロシア正教会の総主教庁とアメリカ正教会の府主教庁と日本の正教会の代表が会談し、日本の自治独立が決まる。
1970年 (昭和45年)	4月、日本の正教会、聖自治独立教会として発足。 同月、聖ニコライ、聖使徒に列聖される。
1978年 (昭和53年)	5月、「聖なる日本の使徒」ニコライ大主教記念聖堂建設される。

イコン——受肉の神秘への眼差し

西南学院大学博物館
学芸調査員 宮川 由衣

はじめに

イコン（聖像画）は、ギリシア、ロシア、そして東ヨーロッパの国々など、ビザンティンの伝統を担う東方正教会の祈りにおいて重んじられてきた。人々は、イコンの前で十字を切り、それに接吻する。教会堂の奥には、複数のイコンが掲げられた祭壇障壁と呼ばれる壁（ギリシア語でイコノスタシス、「イコンを立てる」の意）があり、聖職者がその扉を通過して壁の内側と外側とを行き来し、キリストを記念する聖体礼儀（典礼）が執り行われる。香炉の煙と香りに包まれたほの暗い教会堂に、蠟燭の明かりが灯され、イコンを照らし出す。

イコンには、キリストや聖母子、そして諸聖人の肖像のほか、キリストの生涯や聖母マリアの生涯などを表した物語場面が描かれ、基本的には卵白を溶剤とするテンペラ絵の具で板に描かれる。また、板以外にも象牙板や真鍮、また金属板を打ち出したものなど、その技法は様々である。

ところで、「イコン」という言葉はギリシア語の「エイコーン（εἰκών）」に由来し、それは「似像・似姿」ないし「写し」を意味する。この「似像」という言葉は、『創世記』1章、世界創造の第6日目に、神によって以下の文脈において語られる。

神は言われた、われわれはわれわれの似像 (eikōn) と類似性 (homoiōsis) に即して人間を創ろう。……神はその似像に即して人間を創り、男と女とに創った。(創世 1, 26-27)¹

これは旧約聖書のはじめに高らかに宣言された人間把握である。しかし、そうした創造の本源の姿は、人間のいわゆる原罪（創世 3, 1-13）によって崩されてしまう。そして、神と人間との間には掟が立てられた。周知のように、神がモーセに授けた十戒の掟は偶像崇拜を厳しく禁じている。その第二戒には、「あなたはいかなる像も造ってはならない。……それらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない（出エジプト 20, 4-5）」とある。

ここで一つの問いが生じる。「イコンにおいてキリストや聖母子を描くのは偶像崇拜ではないのか」と。実際、ビザンティンにおいては、「イコンの使用は偶像崇拜である」とするイコノクラスム（聖像画破壊運動）との格闘の歴史があった。

さらに、旧約聖書においては、偶像崇拜と同様、神を見ることも徹底的に否定されてきた。『出エジプト記』33章で神がモーセに次のように告げているとおりである。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」（同 33, 20）と。

しかし、新約聖書において、目に見えない神の永遠の力と神性とは、イエス・キリストという存在を通してこの世界に顕現する。それは、ヨハネ福音書の冒頭、「神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿った」（ヨハネ福音書 1,14）

という言葉に表される「受肉」である。あらかじめ結論を示しておく、教父たちはこのキリスト教の根本とも言うべき重要な事態、すなわち「キリストの受肉」という神秘を見つめて聖像画破壊主義と闘い、イコン崇敬を神学的に証したのである。この点を踏まえ、まずはイコンをめぐる論争とその歴史的背景を振り返っておこう。

イコノクラスム（聖像画破壊運動）とその歴史的背景

8世紀から9世紀にかけてビザンティン帝国で起こったイコノクラスム（聖像画破壊運動）は、時の皇帝の判断によって始められた。最初に聖像画破壊主義の姿勢を示したのは、皇帝レオン三世（在位 717-741）である²。レオン三世のもと、754年に公会議が招集され、イコノクラスムが決議された。また、続くコンスタンティノス五世（在位 741-775）は、自ら聖像画崇拜を攻撃する神学論文を著している。J・メイェンドルフによれば、こうした聖像画破壊主義運動の内部には次の三つの歴史的要素が現れてくるという³。

(1) 宗教文化の問題

ギリシア語文化圏のキリスト者たちにおいては、過去の異教時代から宗教的な像への嗜好が継承されていた。初代教会が「そのような美術は偶像崇拜的である」と断罪すると、三次元の形態は実質的には消滅したが、新たなキリスト教的二次元の形態が姿を現した⁴。

一方、東方のその他の文化圏のキリスト者たち、とりわけ、シリア人とアルメニア人とは、元来、画像の使用に傾くことははるかに少なかった⁵。現に、聖像画破壊主義を支持した皇帝たちは、イサウリアやアルメニアの出自であった。聖像画破壊運動を開始したレオン三世はイサウリア出身であり、その後、レオン四世（在位 775-780）が没し、未亡人のイレネが摂政となってイコン崇敬を復活させるが、アルメニア出身のレオン五世（在位 813-820）が即位すると、再び聖像画破壊主義運動が起こった。

(2) イスラム教との対決

また、アラブ人によるパレスティナ、シリア、そしてエジプトの征服以来、ビザンティン帝国は常にイスラム教との軍事的・思想的対決の中にあつた。その中で、キリスト教のイコンの使用をめぐる、偶像崇拜であるという非難が繰り返し行われた。こうした中、当時の皇帝たちは、イスラム教によるこのような批判に対処できるよう、キリスト教を純化することを試みたのである。

(3) ヘレニズムの靈魂論の遺産

さらに、聖像画破壊主義的思想傾向は、初期のキリスト教にまで遡ることができる。キリスト教の初期の弁証家たちは、

神の表現を一切認めない旧約聖書の禁令をユダヤ人と同様、文字通りに受け取っていた。

キリスト教の図像表現はすでに三世紀には栄え始めていたが、いわゆるオリゲネス主義の周辺では、プラトン主義的靈魂論の影響があった⁶。それは、物質に、神によって創造された永遠の存在があることを否定し、唯一の真の實在は「知性的なもの」と主張するものである。そして、こうした思想的伝統にあっては、聖像画破壊主義的傾向が存続していたのであった。皇帝コンスタンティヌスの妹コンスタンティアがエルサレムを訪問し、エウセビオスにキリストの画像を求めた時、彼女の受けとった回答は、「イエスの物質的な画像への彼女の関心は真の信仰にはふさわしくない」というものであった。最初の聖像画破壊主義者である皇帝レオン三世の神学顧問たちはオリゲネス主義者であり、エウセビオスと同一の見解を持っていたことは確かであった。

イコノクラスムの克服

さて、レオン三世がイコンに反対する公式の勅令を發布する以前に、すでに宮廷の中には聖像画破壊主義が起り始めていた。こうした中、コンスタンティノポリス総主教ゲルマノス一世は、聖像画破壊主義に対し、「イエス・キリストの肉における生涯」、すなわち「受肉」というキリスト論的論拠を使って反論している。

われわれの主イエス・キリストの肉における生涯と、その受難、救いを与える死、そこから生じる世界の贖いをめぐる永遠の想起の中で、われわれは、キリストをその人間的な姿で——すなわち、目に見える顕現によって——表現する伝統を受け、このようにして「言（ロゴス）なる神」の自己無化を崇めていると理解してきた⁷。

このように、ゲルマノスは、聖像画破壊主義に対する正統主義の最初の証人となった。その後、イコノクラスムの克服に大きな役割を果たしたのが、ヨハネス・ダマスケヌス（680頃-749/754頃）とストゥディオスのテオドロス（759-826）であった。ヨハネスの最初の論文は、次の言葉で始められる。

わたしは、見えざる方である神を、見えざる方としてではなく、肉と血への参与によってわれわれのために見える方となった限りで表現する⁸

ヨハネスはさらに次のようにも述べている。

以前には、神は体も形も持たず、どのようにしても表現されることはできなかった。しかし今日では、神が肉において現れ、人間の中に住まわれたので、神の中に見えるものをわたしは表現することができる。わたしは物質を崇めはしないが、物質の創造者、わたしのために物質となった方、肉の生命を担った方、物質によってわたしの救いを達成した方、をわたしは崇める⁹。

このように、ヨハネスが強調するのは、「神自身の意志によって、物質的な存在を担い、物質に新たな機能と尊厳とを与えることによって、神は見えるようになった」¹⁰という点である。また、ヨハネスは、聖像画破壊主義が、「像」と「原型」とを同一視していることを非難した。子と聖霊だけが父たる神の「本性的な像」であり、父と同一本質（実体）であるが、神のそれ以外の像は本質的にはその原型とは違っており、したがって「偶像」ではないのである。

787年の第2ニカリア公会議では、「像」と「原型」、それぞれへの祈りが次のように区別されている。

われわれがイコンに捧げるのは「接吻」と「畏敬のプロスキネーシス」であって、「われわれの信仰による真実のラトレイア」ではない。ラトレイアは神性のみにもふさわしいもので、われわれがイコンに捧げるのは生命を与える貴い十字架の像や聖なる福音書やその他の敬虔な捧げものに対するのと同じプロスキネーシスである。またイコンの礼拝には、昔の人々が敬虔な習慣としていたように、香や蠟燭が捧げられるべきである。¹¹

ここでは、「ラトレイア」（礼拝）と「プロスキネーシス」（崇敬）という二つの祈りが区別されるが、それは第2ニカリア公会議以前にヨハネス・ダマスケヌスによって論じられていた。神に対しての祈りは「ラトレイア」、それ以外の被造物に対しての祈りは「プロスキネーシス」という言葉で表される。このうち、前者は「絶対的祈り」、後者は「相対的祈り」という意味合いである¹²。したがって、被造物であるイコンへの祈りは「プロスキネーシス」（崇敬）であって、「ラトレイア」（礼拝）はその原型たる神に対してのみ捧げられるのである。

さらに、修道制の主要な改革者の一人であったストゥディオスのテオドロスによってもイコンは擁護される。テオドロスによれば、キリストのイコンは「人間イエスの像」であるだけでなく、「受肉したロゴスの像」でもあるという。イコンを可能にさせるキリストの人間性は、神の像を再び完全に担っている「新しい人間性」である。そして、この事実、美術の形式としてのイコンの手法に反映されねばならず、したがって、美術家はこのようにして疑似サクラメント的な機能を受けとるのである¹³。

テオドロスは、美術家を、自分の像に従って人間を創った神自身にたとえる。

神がその像と似姿に従って人間を創ったという事実は、イコンの手法が神的な行為であることを示している¹⁴。

そして、842年に皇帝テオフィロス（在位 829-842）が没し、未亡人のテオドラが幼い皇帝ミカエル三世の摂政となって再びイコン崇敬を復活させ、843年にイコノクラスムが終結した。

メイェンドルフは、イコノクラスムとその克服について、「正統主義の勝利は、宗教的な信仰が命題、書物、個人的な体験だけでなく、物質に対する人間の力、美的な体験、聖像画の前での動作や体の所作によっても表現されることができると

いう意味を持っていた¹⁵と述べている。

アイコンが証しするように、「素材・物質」は神性を宿す器ともなり得るのである。それは、キリスト教の伝統においては「魂のみの救い」が語られることがなく、「身体」ないし「身体性」が極めて重要な意味を持つことに関わっている。そこで次に、キリスト教の伝統において重視される身体性に注目し、アイコンが東方キリスト教の伝統において崇敬されてきた意味を考えたい。

「神の似像の再形成」と身体性

さて、本稿のはじめに見たように、「アイコン」（聖像画）という言葉はギリシア語では「エイコーン εἰκών」、すなわち「似像」であった。そしてそれは、「われわれはわれわれの似像 (eikōn) と類似性 (homoiōsis) に即して人間を創ろう」（創世 1, 26）という神の言葉に表されていた。これは、聖書における人間観の中心に関わる表現であり、「神を受容し宿しうもの」という人間の最上の希望を指し示すものである。

しかし、この「神の似像」とは、われわれのなりゆくべき姿であって、すでに成就している姿ではない。「神の似像」は、この歴史的・時間的世界にあってはあくまでも「人間の原型ないし範型」として志向されるものとしてあり、その道行きにあって、「身体性」や「時間性」が人間の変容可能性を担う不可欠なものとして用いられるのである。

このような、われわれ人間の救い（完成）の根拠となるのが、神の言（ロゴス）の受肉の真実にほかならない。そこで、再びヨハネ福音書の一節を引用したい。

神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿った。（ヨハネ福音書 1,14）

325年のニカイア信条は、アレキサンドリア派がキリストの人性のみを主張したのに対して、「キリストは神と同一実体 (homoiōsis) であり、また真の神にして真の人間である」とした¹⁶。ここで注目されるのは、この言明が客体としてのイエス・キリストについての把握である以上に、われわれ人間の救い（完成）との連関の中で、それらの成立根拠として語られていたということである¹⁷。

ニカイア信条成立の立役者であるアタナシオス (295頃-373) は、言（ロゴス）の受肉について次のように述べている。

神のロゴスが人間となった（人間のうちに宿った）のは、われわれが神になる（神に与らしめられる）ためである¹⁸。

「われわれ（人間）が神となる」とは、「神の似像」を成就させることである。こうした「神化」(theōsis) の思想は、東方キリスト教・ビザンティンの伝統にあって、とりわけ大切にされてきた。「神化」とは、端的に「人が神となること」を意味しているのではなく、神的生命への与りの道と解される。すなわち、「神の似像の成就」の道にあって、身体が器となって、われわれ人間は神の本性ととの結合へと与ってゆくべく呼びかけられていることを意味するのである。

おわりに

アイコンを前に祈り、観想するとき、われわれのうちにその原型が何ほどか映じてくるであろう。アイコン、すなわち「像」とは区別される。ゆえに、アイコンそのものは祈りの対象ではない。しかし、われわれはアイコンを通して、その原型へと思いを馳せ、神の本性へと与ってゆく道を多少とも歩むことができるだろう。神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿ったのだから。アイコンはこうした受肉の神秘を証している。

- 1 新共同訳では、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と訳されている。東方キリスト教の伝統において用いられてきた七十人訳・ギリシア語聖書に即せば、「似像と類似性に即して人間を創ろう」と訳される。なお、ここで「われわれ」とあるのは、一般に「神の尊厳複数」——教父の伝統にあって、「父、子、聖霊」の三位一体がすでに含意されていると解される——を示すとされる。
- 2 726年の夏、エーゲ海で海底爆発があった。皇帝レオン三世は、これを神の怒りと見て、その原因はアイコン崇拝であると考えた。そして、コンスタンティノポリスの宮廷への中央入り口であるカルケー門に掲げてあったキリスト像を取り払うよう命じたという（鐸木道剛、定村忠士『アイコン——ビザンティン世界からロシア、日本へ』毎日新聞社、1993年、p. 35）。
- 3 John Meyendorff, *Byzantine Theology: Historical Trends and Doctrinal Themes*, Fordham University Press, New York, 1974, reprinted, 1983, pp. 42-53 (J. メイェンドルフ『ビザンティン神学——歴史的傾向と教理的主題』鈴木浩訳、新教出版社、2009年、pp. 72-90) 引用文について、基本的に邦訳に準拠したが、論述の都合上一部表記を変えたところもある。
- 4 なお、コンスタンティヌス帝の友人であり、初代教会の貴重な記録である『教会史』を著したエウゼビオスの記録によれば、カエザリア・フィリップの町には、イエスの似姿（エイコーン）であると言われたブロンズ製の彫像があったとい、エウゼビオス自身、その像を見たことがあると記している。それは、マタイ福音書 9章 20節以下、マルコ福音書 5章 25節以下、ルカ福音書 8章 43節以下に語られる、キリストによる長血の女の癒しを記念した像であり、その家の前に、両手を伸ばして嘆願しているポーズの女の彫像と、それに向かって片方の手を伸ばす男の像があった。（鐸木道剛、定村忠士、前掲書、p. 23。）
- 5 これらの地域では、キリストにその神性のみを認める単性論が説かれてきた。キリスト単性論にあっては、キリストの人性、つまりキリストが人でもあったことは重視されない。したがって、神であるキリストの姿を描くのは偶像崇拝にほかならないのである。451年のカルケドン公会議において、こうしたキリスト単性論は異端とされ、両性論が採択されて「イエス・キリストは真の神であり、かつ真の人間である」ということが教義として確立した。
- 6 オリゲネス (185頃-254頃) は、アレクサンドリアのクレメンス (150頃-215頃) ——教父哲学の祖とされる——の跡を継ぐアレクサンドリア学派の代表者として、聖書釈義の伝統の礎を築いた人物である。オリゲネスの教説の一部は後の時代からすれば逸脱した部分があったため、オリゲネスが没してから約 300年を経た 553年の第五回公会議でオリゲネス派は異端とされるに至った。
- 7 ゲルマノス一世『異端と教会会議』, *Germamus I, De haeresibus et synodis*; PG 98:80A(Meyendorff, *op.cit.*, p. 45).
- 8 ヨハネネス・ダマスケヌス『講話』, John of Damascus, *Or. I*; PG 94 :1236C(Meyendorff, *op.cit.*, p. 45).
- 9 ヨハネネス・ダマスケヌス、同、*Ibid.*; PG 94: 1245A(Meyendorff, *op.cit.*, pp. 45-46).
- 10 Meyendorff, *op.cit.*, p. 45.
- 11 J. D. Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, vol., 13, Graz, 377C-380A (鐸木道剛『『もの』としての聖書、『もの』としてのアイコン』、西南学院大学博物館研究叢書『キリスト教の祈りと芸術——装飾写本から聖画像まで——』所載、花乱社、2017年、p.67)
- 12 上掲書、p. 67。
- 13 Meyendorff, *op.cit.*, p. 48.
- 14 ストゥディオスのテオドロス『聖像破壊論者反駁』Theodore the Studite, *Antirrh.*, III., PG 99: 420A(Meyendorff, *op.cit.*, p. 48).
- 15 Meyendorff, *op.cit.*, p. 52.
- 16 *Enchiridion Symbolorum, Definitionum et Declarationum de Rebus Fidei et Morum*, H. Denzinger, Editio xxx VI, Herder, Romae, 1976, pp. 125-126, Symbolum, 19, lun. 325 (『カトリック教会文書資料集——信経および信仰と道徳に関する定義集——』、H・デンツィンガー編、A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1992年)。
- 17 谷隆一郎『アウグスティヌスと東方教父——キリスト教思想の源流に学ぶ——』九州大学出版会、2011年、p. 218。
- 18 アタナシオス『ロゴス（言）の受肉』第 54 章（上掲書、p. 218）。

日本ハリストス正教会と九州

—人吉ハリストス正教会（生神女庇護聖堂）について—

西南学院大学博物館
学芸調査員 中禮尚史

はじめに

1861（文久元）年、亜使徒聖ニコライは正教の教えを伝道するために来日した。キリスト教解禁後、東北地方を中心に熱心な宣教活動を行い、明治後期にはカトリックに次ぐ信者数を獲得した。

現在の日本各地方における教会数をみると、東日本特に東北地方に多く分布しているのがわかる。西日本は東日本と比べると非常に少ない。

現在の九州には、鹿児島・人吉・熊本・福岡（伝道所）に教会があり、人吉ハリストス正教会に常駐している司祭が一人で3つの教会と1つの伝道所の管轄をしている。この司祭が各週日曜日に4つの教会を巡回し、聖体礼儀（礼拝）を行っている。

九州各教会の成立年は、鹿児島が最も古い1878（明治11）年であり、熊本は1879（明治12）年、人吉は1884（明治17）年、福岡は戦前まで小倉や久留米に教会が存在していたが、第二次世界大戦の影響で教会は消滅した。しかし、2010（平成22）年に伝道所として復活した。また、鹿児島教会や熊本教会も第二次世界大戦の空襲により聖堂は消失している。鹿児島教会は1957（昭和32）年に、熊本教会は1961（昭和36）年に再建した。一方、人吉教会は第二次世界大戦によって大きな被害を受けることはなかった。さらに1952（昭和27）年8月、九州の正教会として初めて宗教法人に登録された¹。人吉ハリストス正教会は生神女マリアの庇護を祈る聖堂である。正教会はいったいどのようにして人吉に持ち込まれたのであろうか。

人吉ハリストス正教会は熊本県人吉市に位置する。人吉市は人口3万人ほどの町であり、中世から明治維新に至るまで700年あまり、球磨地方を統治してきた相良氏の城下町として栄えた。相良氏は薩摩藩島津氏と同様に、浄土真宗を禁制するなどキリスト教以外も宗教統制を行っていた。

その後、明治期になりキリスト教が解禁され、人吉にも正教会が持ち込まれる。本稿では、日本ハリストス正教会と九州、特に人吉ハリストス正教会の歴史とその変遷について概観する。

倉本又蔵と人吉正教会

人吉ハリストス正教会の成立については、倉本又蔵という人物が大きく貢献している²。倉本又蔵は人吉九日町（現熊本県人吉市九日町）に「のし屋」という屋号で薬と材木を取り扱っていた商人であった。『人吉繁昌記』³によると、

薬店ののし屋は河内屋の隣にじみなる土蔵作り、垂れし暖簾も最も深く、別に材木商をも兼ね、二兎を逐ふて二兎を獲る主人の技量中々に感心、

とあり、商人として成功していたようだ。また、人吉町の消防ポンプ購入寄付⁴や、人吉公立病院へ治療器械の寄付⁵を行っている。1889（明治22）年度は人吉町において最も納税しており、人吉町外合わせて15の村の土地を所有していた⁶。倉本は人吉町きっての商人・地主であり、積極的に地元還元をしていた。

それではなぜ倉本は正教徒になったのであろうか。『正教新報』⁷に人吉伝教について詳しく書いてある⁸。

扱倉本氏が始め正教を信奉するの便を得て后同地に布教することに尽力ありし次第を聞くに一体倉本氏は商家なれハ商用にて大阪府下に寄寓なし居られたる時、住家の造作を營まんとて一人の大工を傭はれたると、氏が奉教の志を起すの基となりたるなり、

大阪での大工との出会いが、倉本が正教を信仰するきっかけであった。この大工により正教の教えを聞いた倉本は

倉本氏ハ實に然るや新説ハ必ず丁寧に穿鑿せざるべからし之を攻究ずして妄りに非毀するハ是自ら知識を殺すものなり、余もこの正教を聴聞して其眞偽正邪を辨し果して眞理と認むるにおいてハ余も之を信奉せん、

と、早速その日の夕暮れに講義所へ向かい、大阪の伝教者イヤコフ松田と出会い、連日講義を聞くことになる。倉本は正教を眞理だと認め、ついに正教徒となった。また、倉本は

氏自ら思へるよう余獨り幸に神恩を蒙りて救を得たるも郷里の家族ハ一人も眞の道を知るものなく、偶像邪神に迷ひ居ることなれハ速かに郷里に歸りて家族を始め近隣親知の人々をも己と偕に眞正の幸福に導かん、

と、決心した。その後、正教の眞理を伝えるため大阪に留まり日々教理を研究した。1884（明治17）年5月に人吉へ帰郷した倉本は、家族や近隣住民に正教の教理を日夜講義した。その結果、家族番頭手代に至るまで信仰を起し、洗礼を受けた。さらに、倉本一家は人吉町の住民にも教理を伝え、多くの住民が正教へ改宗した。その後、信者が拡大した人吉へ本部より伝教者ステファン釘宮や伝教者パワエル小杉が派遣され、7月9日に人吉紺屋立町（現熊本県人吉市紺屋町）に教会が建

てられた。これが人吉ハリストス正教会の起こりである。1884（明治17）年10月に発行された『正教新報』⁹によると、

熊本県下人吉駅において数月前伝教者釘宮氏より啓蒙を請けし新進者七名ありたるよし、其后小杉氏か同所に出張され引継ぎ、毎夕講義を開かるるに來聴者平均百名余なりといふ、

毎夕行われていた伝教者の講義には100名前後が参加しており、人吉町人は正教に対して高い関心があった。このようにして、人吉に正教会が入り、信仰が広がっていった。

また、同時期の九州にあった正教会の教会は1885（明治18）年に開催された全国公会の記録¹⁰によると、久留米、柳川、中津、口ノ春、熊本、佐土原、宮崎、鹿児島、川内に存在していた。

聖ニコライの人吉訪問

聖ニコライは熱心に伝教地を巡回していた。1882（明治15）年は東北地方を、翌1893（明治26）年は信州・北陸地方など各地を巡回した。九州地方は1891（明治14年）に巡回した。その際に聖ニコライは人吉正教会を来訪している。その時の様子が『ニコライの日記』¹¹に残されている。

町に着き、教会の建物の前で信徒たちに迎えられた。こどもたちがお祈りを覚えているか、試験をした。一人も残らず全員が「天主経（主の祈り）」をふくむ大事な祈りはもちろん、聖詠第50番までもきちんと覚えているのがわかった。そして全員が恥ずかしがらずにお祈りを唱えた。三歳から五歳くらいとこのこどもたちまでが短いお祈りを覚えており、かしまった態度で十字を切ることも知っている。これは、なんといっても伝教者（パウエル小杉雅枝）の妻アガフィヤのおかげだ。アガフィヤはこどもたちを私に紹介し、お祈りを唱えさせ、間違えと直してやり、つかえるとヒントを与えたりしていた。聖歌は斉唱で、なかなかよくそろっていて、上手だ。それも彼女のおかげだ。大変努力して、こどもや大人たちに教えたのだ。

パウエル小杉は人吉正教会に派遣される前年、鹿児島教会にてアガフィヤと婚配機密を行っていた¹²。現地の伝教者やその妻が子どもから大人まで幅広く、熱心に布教活動を行っていた様子うかがえる。彼らの働きも人吉に正教会が根付いた一因であろう。

また、異教徒のために聖ニコライが説教を行うと、聴衆者は約400人集まり熱心に聖ニコライの話を聞いていたようだ。

明治後期の人吉ハリストス正教会

1898（明治31）年の内務省調査では、正教会の信者数はカトリックに次ぐ勢いがあった。1902（明治35）年の全国公会記録『大日本正教会公会議事録』¹³によると、日本全体での正教会の教会数は260堂、信徒数は27,245人であり4年前の

調査と比較すると、教会数・信徒数ともに上昇している。

しかし、九州では教会数は16堂、信者数は616人で、九州のみの正教会信者数は日本正教会全体のわずか2パーセントほどしか存在しなかった。そのような中、人吉正教会は鹿児島正教会

表2 1898（明治31）年における日本のキリスト教信者数（内務省調査）

宗派	教会数	信徒数
カトリック	108	53,924
正教会	170	25,231
日本組合基督教會	70	13,627
日本基督教會	67	12,441
聖公会	95	8,237
メソジスト	78	5,177

※『正教新報』482号、1901（明治33）年を基に作成。

表3 1902（明治35）年九州の正教会情勢

		信徒数	信徒戸数
筑前国	福岡	30人	13戸
	口ノ春	3人	3戸
筑後国	柳河	43人	14戸
	久留米	13人	4戸
豊前国	小倉	40人	13戸
	中津	59人	25戸
豊後国	大分	6人	3戸
	臼杵	3人	3戸
肥前国	唐津	18人	6戸
肥後国	熊本	46人	28戸
	人吉	99人	19戸
日向国	宮崎	66人	22戸
	飫肥	16人	5戸
	都ノ城	12人	9戸
	延岡	16人	5戸
薩摩国	鹿児島	126人	44戸

※『大日本正教会公会議事録』1902（明治35）年を基に作成。

に次ぐ人数の信徒がいた。1902（明治34）年の熊本県統計表¹⁴によると、人吉市には3,952人住と記録されている。つまり人吉市のおよそ40人に一人が正教徒であった。

また、戸数と信者数を比べると、人吉では1戸数に対して約5人の信者が存在した。一方、他の地域の教会では鹿児島教会が約2.9人、熊本教会が約1.6人、柳川教会が約3.1人、福岡教会が約2.3人、と人吉教会の一戸数当たりの信者数の数は他の教会と比べて高い。つまり、人吉教会は他の教会と比べて親族単位で入信していたのではないかと考えられる。

1933（昭和8年）の教会移転から現代にかけて

1930（昭和5）年、立町の教会は火災にあったが、再建された¹⁵。その後、1933（昭和8）年に現在地である人吉町字辻市街地（現熊本市人吉市願成寺町）移転することになる。その当時の様子が『正教時報』¹⁶に記載されている。

現在の教會敷地二百餘坪を、會堂を除き、金五千圓にて賣却、千二百圓の教會債務を果し、金二千四百圓にて四百五十坪の地を購入したり、教會新敷地は人吉町字辻市街地住宅にて、道路面より二間の高所とて、眺望絶佳聖堂所在地として同町中最良の場所なり、價格の低廉なりしは舊時寺院ありし所とて、後方に四十五基の墓地あり、異教人が邸宅として買入るを欲せざる故なり。

人吉町字辻市街地の新教会敷地は立町の教会敷地と比べると坪数は二倍になり、買値は売値の半額以下であった。また、高台に位置しており「眺望絶佳」「同町最良の場所」であった。

さらに、価格が安い理由として新敷地の裏手に墓地があり、買い手がつかなかったようだ。旧敷地にあった会堂は貸家住宅として新敷地に移転している。この教会裏手の墓地群と旧会堂は現在も現教会敷地に存在している。



小高い丘の上にある人吉ハリストス正教会



教会裏手の墓地



旧会堂

※共に筆者撮影

おわりに

以上より、人吉ハリストス正教会の沿革を辿ってきた。九州の多くの教会は第二次世界大戦時の空襲・混乱で教会を失い、再建するまで時間がかかった。しかし、人吉教会は戦災から逃れ、教会を維持してきた。また、2015（平成27）年には聖堂の増改築を行い、九州正教会の中心として活動している。

倉本又蔵や伝教者ステファン釘宮、伝教者パワエル小杉とその妻アガフィアが広めた正教の教えは、現代でも守られ続けている。

- 1 『正教時報』第760号（1952年11月25日）。
- 2 『人吉市史第二巻上』（1990年、人吉市史編纂審議会編さん）p.「明治十七年追記 人吉九日町の倉本又蔵大阪にて基督教に入信し、教師小杉雅枝を伴い、七月九日人吉立町に教会を設ける。」とある。
- 3 『人吉繁昌記』1899（明治32）年発行。著者は花外樓主人（発行と出版をかねた江島商店の主人の江島権十郎と言われている）人吉町最初の町内紹介誌。
- 4 前掲書『人吉市史第二巻上』p.667。
- 5 前掲書p.706。
- 6 前掲書p.708。
- 7 1880（明治13）年、正教会は「愛々社」という編集局を設け、『正教新報』という名で月二回刊行した。母体となったのは1877（明治10）年より刊行され、伝教者たちが各地の教会情勢を伝えていた『教会報知』である。『正教新報』は各地の教会情勢だけではなく、正教の啓蒙と学びのために記事が中心であった。その後、聖ニコライが永眠した年である1912（大正元）年に『正教時報』が刊行され、「愛々社」に代わって「正教時報社」が編集を務めた。『正教時報』は現在に至るまで刊行されている。
- 8 『正教新報』第104号（1885年3月15日）。
- 9 『正教新報』第94号（1884年10月15日）。
- 10 『大日本正教会公会議事録』1885（明治18）年、正教本会。
- 11 ニコライ著、中村健之助訳『ニコライの日記上』2011年、岩波書店 p.361-362。
- 12 前掲書『正教新報』第104号。
- 13 石橋喜三郎編『大日本正教会公会議事録』1902年、日本ハリストス正教会編集局。
- 14 熊本県『熊本県統計表 明治35年』1912年、熊本県 p.71。
- 15 熊本県教育会球磨郡教育支会『球磨郡誌』1941年 p.597。
- 16 『正教時報』第23巻1号（1934年1月）。

2018 年度西南学院大学博物館企画展 I 「東方キリスト教との出会い」 出品目録一覧

資料名	英訳	製作地／年代／形態	法量 (cm)	原資料	所蔵先	
第1章 東方キリスト教の世界—光は東方より						
1	シナイ写本	Sinai Codex	エジプト／4世紀／冊子本	縦45.0×横40.5	エジプト、4世紀、冊子本、大英図書館(ロンドン)	西南学院大学博物館
2	聖ペテロと聖パウロ	St. Peter and St. Paul	エチオピア／19世紀／羊皮紙	縦17.0×横10.0		西南学院大学博物館
3	スラヴ語聖書	Slavic Bible	1998年／書冊	縦15.0×横11.0		西南学院大学博物館
4	キリスト	Christ	ロシア／20～21世紀／モザイク	縦50.0×横42.0		仙台ハリストス正教会 辻永 昇 大主教
5	聖ニコラ	St. Nicholas	セルビア／20～21世紀／フレスコ	縦34.0×横30.3		仙台ハリストス正教会 辻永 昇 大主教
6	聖三位一体(複製)	The Holy Trinity	ロシア／20～21世紀	縦17.3×横13.8	アンドレイ・ルブリョフ《聖三位一体》ロシア、15世紀初頭 板・テンペラ、142×114cm トレチャコフ国立美術館(モスクワ)	西南学院大学博物館
7	キリスト(複製)	Christ	ロシア／20～21世紀	縦18.7×横13.6	アンドレイ・ルブリョフ《キリスト》ロシア、15世紀初頭 板・テンペラ、158×108cm トレチャコフ国立美術館(モスクワ)	西南学院大学博物館
第2章 イコナー祈りのかたち						
第1節 ウラジーミルの聖母—聖なる写し						
8	ウラジーミルの聖母(複製)	Theotokos of Vladimir	ロシア／20～21世紀	縦19.0×横13.7	12世紀、板・テンペラ、104×69cm、トレチャコフ国立美術館(モスクワ)	西南学院大学博物館
9	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	ギリシア／20～21世紀／板、テンペラ、ガラス、打ち出し	縦26.0×横19.5		個人蔵
10	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	ギリシア／20～21世紀／板、テンペラ、ガラス、打ち出し	縦25.5×横18.0		個人蔵
11	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	ギリシア／20～21世紀／板、テンペラ、打ち出し	縦19.0×横5.0		個人蔵
12	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	20～21世紀／板、テンペラ	縦6.0×横5.0		個人蔵
13	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	20～21世紀／陶板	縦7.3×横5.3		個人蔵
14	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	20～21世紀／陶板、打ち出し	縦5.8×横4.7		個人蔵
15	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	20～21世紀／陶板、打ち出し	縦6.0×横5.0		個人蔵
16	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	パレフ(ロシア)／2000年／板、テンペラ	縦30.0×横24.0		個人蔵
17	ウラジーミルの聖母	Theotokos of Vladimir	日本／20～21世紀／陶板、アクリル	縦23.5×横19.5		個人蔵
第2節 イコンと素材—物質の聖化						
18	聖母の庇護	Intercession of the Virgin Mary	ロシア／18世紀／板、着色	縦44.2×横39.4		西南学院大学博物館
19	聖ボンファティオスと聖アナスタシア	St. Bonifatius of Tarsus and St. Anastasia	ロシア／19世紀／板、着色	縦8.8×横6.8		西南学院大学博物館
20	聖ワシーリーと聖ヨハネス・クリュストモス	St. Basil the Hermit and St. Joannes Chrysostomos	ロシア／19世紀／板、着色	縦8.8×横6.8		西南学院大学博物館
21	キリストの鞭打ち	Flagellation of Christ	ロシア／板、着色	縦5.5×横4.5		西南学院大学博物館
22	東方三博士の礼拝	Adoration of the Magi	ロシア／19世紀／真鍮	縦7.3×横5.0		西南学院大学博物館
23	全能者キリスト	Christ Pantocrator	ギリシア／20～21世紀／板、着色	縦19.0×横15.0		西南学院大学博物館
24	全能者キリスト	Christ Pantocrator	ロシア／20～21世紀／打ち出し	縦32.0×横17.0		西南学院大学博物館
25	カザンの聖母	Our Lady of Kazan	20～21世紀／額装	縦26.3×横22.5		西南学院大学博物館
26	ズナメニエの聖母	Our Lady of the Sign (Znamenie)	ロシア／20～21世紀／額装	縦16.5×横14.5		西南学院大学博物館
第3節 19世紀ロシア・イコンと山下りん						
27	正教小画帖	Small Pictorial Orthodox Christianity Handbook	日本／1902(明治35)年／書冊	縦19.5×横15		西南学院大学博物館
第3章 祈りの拡がり—日本と正教会						
第1節 聖ニコライによる布教活動						
28	魯西亜国条約並税別	Treaty of Amity and Commerce between Japan and Russia	日本／江戸時代後期／書冊	縦25.8×横18.3		西南学院大学博物館
29	我主イイススハリストスノ新約	New Testament	日本／1901(明治34)年／書冊	縦23.0×横15.5		西南学院大学図書館
30	絵入通俗正教自修書	Pictorial Orthodox Christianity Handbook	日本／1904(明治37)年／書冊	縦18.0×横12.0		西南学院大学博物館
第2節 日本ハリストス正教会の祈り						
31	聖詠経	Hymn's prayer book	日本／1885(明治18)年／書冊	縦22.5×横15.5		西南学院大学図書館
32	小祈祷書	Small prayer book	日本／1884(明治17)年／書冊	縦18.0×横12.5		西南学院大学博物館
33	時課経	Book of hours	日本／1884(明治17)年／書冊	縦22.0×横16.0		西南学院大学博物館

主要参考文献

■単行書

・東方キリスト教

John Meyendorff, *Byzantine Theology: Historical Trends and Doctrinal Themes*, Fordham University Press, New York, 1974, reprinted, 1983 (J・メイエンドルフ『ビザンティン神学——歴史的傾向と教理的主題』鈴木浩訳、新教出版社、2009年)。
森安達也『東方キリスト教の世界』山川出版社、1991年。
谷隆一郎、岩倉さやか訳『砂漠の師父の言葉——ミーニュ・ギリシア教父全集より——』知泉書館、2004年。
荻野弘之編『神秘の前に立つ人間——キリスト教東方の靈性を拓く——』新世社、2005年。
谷隆一郎『人間と宇宙の神化——証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって——』知泉書館、2009年。
谷隆一郎『アウグスティヌスと東方教父——キリスト教思想の源流に学ぶ——』九州大学出版会、2011年。
中西裕人『孤高の祈り——ギリシャ正教の聖山アトス——』新潮社、2017年。
田島照久、阿部善彦編『テオシス：東方・西方教会における人間神化思想の伝統』教友社、2018年。

・アイコン

Olga Medvedkova, *Les icônes en Russie*, Gallimard, Paris, 2010 (オルガ・メドヴェドコヴァ『ロシア正教のアイコン』遠藤ゆかり訳、創元社、2011年)。
濱田靖子『アイコンの世界』美術出版社、1978年。
小田秀夫『山下りん：信仰と聖像画に捧げた生涯』筑波書林、1980年。
松永伍一『聖性の鏡：アイコン紀行』平凡社、1981年。
鐸木道剛、高野禎子責任編集『名画への旅 第4巻 中世Ⅲ 天国へのまなざし』講談社、1992年。
鐸木道剛、定村忠士『アイコン——ビザンティン世界からロシア、日本へ——』毎日新聞社、1993年。
鐸木道剛、高野禎子責任編集『名画への旅 第3巻 中世Ⅱ 天使が描いた』講談社、1993年。
木村重信、鐸木道剛責任編集『名画への旅 第2巻 古代Ⅱ・中世Ⅰ 光は東方より』講談社、1994年。
秋山聰、尾崎彰宏編『西洋美術研究 No. 15 特集=聖俗のあわい』三元社、2009年。
鐸木道剛『山下りん研究』岡山大学文学部研究叢書35、2013年。

・日本正教会

長縄光男『ニコライ堂の人のびと——日本近代史のなかのロシア正教会——』現代企画室、1989年。
ニコライ著、中村健之助訳『明治の日本ハリストス正教会——ニコライの報告書——』教文館、1993年。
中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波新書、1996年。
高橋保行『聖ニコライ大主教——日本正教会の礎——』日本基督教団出版局、2000年。
中村健之助、中村悦子『ニコライ堂の女性たち』教文館、2003年。
教会史編集委員会『仙台ハリストス正教会史』仙台ハリストス正教会、2004年。
司祭ダヴィド水口優明『正教会の手引』日本ハリストス正教会教団全国宣教委、2004年。
長縄光男『ニコライ堂遺聞』成文社、2007年。
司祭パウエル及川信『日本正教会の歴史1——日本の光照者聖使徒聖ニコライの歩み——』日本ハリストス正教会教団西日本主教区宗務局、2008年。
大主教セラフイム辻永昇『聖使徒 日本の大主教 聖ニコライ』日本ハリストス正教会教団 東日本主教区宗務局、2012年。
山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の人間像——北東北における時代変容意識——』清文堂、2014年。
司祭パウエル及川信『神父になったサムライ——日本正教会の歴史——』日本ハリストス正教会教団西日本主教区教務部、2018年。

■展覧会図録

『山下りんとその時代』千葉市美術館ほか、1998年。
『ルオーとアイコン：描かれた聖像』松下電工NAISミュージアム、2004年。
『ロシア皇帝の至宝展：世界遺産クレムリンの奇跡』江戸東京博物館ほか、2007年。

■その他

大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃『岩波キリスト教辞典』2002年、岩波書店。

西南学院大学博物館 2018 年度企画展 I

東方キリスト教との出会い
—祈りのかたちとその拡がり—

編集 宮川由衣 中禮尚史

編集補助 野藤妙 西山萌 鬼束芽依

発行 西南学院大学博物館

〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

TEL 092-823-4785

発行日 2018 (平成30) 年7月17日

印刷 株式会社 インテックス福岡



1891年頃の東京復活大聖堂
(提供：宗教法入日本ハリストス正教会教団)